
妖 あやかし

彪峰イツカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖 あやかし

【Nコード】

N5221Z

【作者名】

彪峰イツカ

【あらすじ】

「お前が私の運命なら、その総てを受け入れるから」
ときは平安。異端の半妖陰陽師と最強のあやかしが織り成す、長編和風恋愛ファンタジー。

オリジナル創作サイト「Never-never Land」より転載

桔梗の巻

第一章

一

初秋の夜更け。都の外れに位置するこの路は人通りもなく、時折聞こえる虫の音だけが透明な空気を揺らしている。男がひとり、ゆったりと歩んでいた。黒を基調とした直垂、烏帽子。だが髪は結わず、長く垂らしている。まだ若く、年は二十歳くらいであろう。

男はゆつくりと視線を月に向ける。闇を照らす月光が白々と男の顔を映し出した。紫電の瞳　ひとにはあり得ぬ色。

彼はひとではない、否、半分はひとである。しかし残り半分の血は、あやかしであった。

父はひとで、母はあやかしであるという。滅多にはおらぬ半妖それは古来より忌むべき存在とされており、本来ならば赤子のうちに殺められていても不思議はない。しかし彼は例外的に生を許され、なおかつ従三位という高位についていた。それは、彼が代々続く陰陽師の家柄である御門家の養子になり、比類のないほど強力な術者に成長を遂げたからであろう。

御門紫苑

それが男の名前であった。

さて、紫苑はただひとり、歩いている。宮中には牛車に乗って参内したのだが、帰り道の途中で先に返してしまった。牛を先導していた童もひとではなく、式神である。彼の屋敷ではひとを使わず、式神で用を済ませていた。半妖である彼に仕えたいという物好きなどいないということも理由のひとつだが、それだけではない。紫苑

は、ひとが不得意だった。

宮中で飲んだ酒が、徐々に醒めていく。

ひとが嫌いというわけではない。嫌うほど付き合いを深めたことがない。友と呼べる唯一の男は今は遠方にいる。宮中の者たちのほとんどが、彼を忌諱していた。

人妖……か。紫苑は苦笑した。宮中の口さがない者たちの間で、自分がどう呼ばれているかくらいは知っている。紫苑が強力な術者であればあるほど、都を邪なものよこしまなもののけから守れば守るほど、彼は悪しざまに言われ、貶められる。

くだらない。怒る気にもならない、というのが本音だった。先帝、今上と二代通して帝の信頼が厚いことが救いかもしれない。それでも どうせ私はひとりだ。

紫苑は足を止めた。冷たい風が吹き抜ける。道の両側の薄がざわすすりざわと音を立てていた。眼を閉じ、虫の音色を聞く。こうしてひとりで居る方がずっと気楽だし、寂しくもない。だから、私はこれからひとりで……。

そう思ったとき、虫の音が消えた。

「……………」

少し遅れて気配を感じた紫苑は、軽く辺りを見回した。何も見当たらない。否、

とくん。

小さな音。

「誰だ……………」

返事はない。

とくん。

二度目はより強く響き、音はその方角を明らかにした。紫苑は警

戒をあらわにしながらも、音に向かって一步、踏み出す。

とくん。

意を決して彼は道を逸れ、その方角に向けて薄の原を歩き始めた。音は何度も彼の耳に届き、徐々にそれは大きくなっていく。まるで彼を呼んでいるようなその音は、どこか懐かしい。この音を自分は良く知っている、きつと聞き慣れている。そんな気がした。

とくん。

「もしかすると……」

これは鼓動の音、だろうか。気付いた紫苑は、何かに憑かれたように駆け出した。鼓動。誰のだろう。何故、彼を呼ぶのだろう。

どくん！

鼓動が彼自身のそれと同調して大きく響いたとき、紫苑は林の奥深くに居た。袴は既に汚れてしまっていたが、紫苑は気にせずさらに足を踏み出す。

「……………」

風が吹き渡った。

紫苑は眼を軽く閉じ　そして眼を開ける。林の中の一際奥、急な滝が切り立った崖を流れ落ちていく、鋭い水音だけが支配する静謐な場所。そこに、それはあった。

「何だ……？」

紫苑はさらに一步、足を進める。滝の中腹に、まるで卵のような円形の塊があった。氷のようにも見えるが、表面は波打っている。先ほどから脈打っているのは、恐らくはそれだった。月明かりに照らし出され、水晶のように煌いている。

「……………」
眼を凝らした紫苑は驚愕に息を飲んだ。その奥に、幼子が入っている。ぼんやりとしか見えないが、確かに子供だ。年は十歳前後か。細い手足を折りたたみ、背中を丸めて、まるで蛹さなぎのように眠っている。

「これは、一体……………」

そつと手を伸ばす。途端、

「くっ?!」

紫苑の体がぐぐつと滝に向かって引き込まれた。そして、

あなた、だれ?

問い掛ける、小さな声。

「な……………」

抗おうとしても抗えず、紫苑の腕はずぶずぶと水の中に入り込んでいった。頭上から水をかぶり、紫苑は全身をしとどに濡らす。

「し、紫苑だ。御門……………紫苑」

紫苑は水を吐き出し、答えた。声は再び、どこからともなく響いた。

しおん……………あなたが、わたしをよんだの?

「よ、呼んでなど……………!」

これ以上引き込まれれば、溺れてしまう。紫苑は腰まで冷たい水に浸かり、滝を見上げた。

それとも……………わたしが……………あなたを……………よんだの……………?

術を使っても抜け出さなければならぬかと思った瞬間、ふつと彼を引っ張る力が消えた。

「……………!!」

同時に幼子を捕らえていた水晶が消え、小さな体が紫苑の腕の中に落ちてくる。何とかそれを受け止めることには成功したが、

「あー!」

体勢を崩し、彼らはもろともに滝壺に落ちた。

二

尖った耳、額に描かれた水色の文様、そして銀髪。水の中から出てきた子供。少女は、どう見てもあやかしであった。

紫苑はずぶぬれのまま、少女を抱えて家路を歩いている。裸のままではずかるうと、自らの衣を一枚脱いでそれに包んだ。どちらにせよ濡れていることには変わらない。

先ほど自分を呼んだ声はこの少女のものだろうか。彼女は先ほどから意識を失ったまま、ぴくりとも動かない。

「しかし……」

紫苑は彼女を抱えなおした。華奢な体はとても軽い。

「これは水龍族ではないか……?」

水族の長、水龍族。

火族の長、鳳凰族。

地族の長、白蛇族。

風族の長、黒鷹族。

それらは強大な力を持つ妖たちの一族で、四天王とも呼ばれている。紫苑の母親はその四天王の一、鳳凰族であったとも聞くが、実は彼自身良くは知らない。彼の父親が誰かということと共に、誰も語ろうとはしない話であった。

紫苑は軽く眼を細める。ひととあやかしの歴史は決して平和なものではない。むしろ、ひととあやかしは幾度となく戦を交えた間柄であった。最初にどちらが仕掛けたのかは分からない。半妖の紫苑

はともかく、並の陰陽師たちを含めたところで、ひとはあやかしの妖力には勝てぬ。しかし、ひとはあやかに比べ圧倒的に数が多かった。そのためにこれまでの戦では大抵ひとの側が勝利を収め、絶滅に追い込まれてしまったあやかしの一族も幾つかある。そのうちのひとつが鳳凰族であり、

「水龍……なんだが」

それは既に二十年ほど前の話であり、水龍族については紫苑も話に聞いて知っているのみである。この少女は一体いつ生まれたというのだろうか。あの滝の中、ずっと時を止めていたとでもいうのだろうか。

私を待っていたとでも……？

「……訳が分からん」

紫苑がそうつぶやいたとき、

「う……ん？」

少女が小さく呻いて眼を開けた。紫苑は足を止める。家まであともう少し。

「眼が覚めたか」

「え……？」

ぼんやりした目線で辺りを探り、やがて紫苑に気付いて眼を見開いた。澄みきった、青い瞳だった。

「あ……あれ？　ここは……？」

「私の家の前だが」

少女は驚いたように眼を瞬きながら、紫苑を見つめる。

「あなた……だれ？」

自分で引きずり込んでおいて、覚えていないのか。喉元まで出てきた問いを飲み込み、紫苑は少女に反問した。

「お前は？」

「私……？　私は……」

少女は首をかしげて考え込み　やがてつぶやく。細い首筋はまだしつとりと濡れて、銀髪が幾筋も絡みついていた。

「知らない。……わからない」

紫苑はため息をつく。

「そんなことじゃないかと思った」

「え？」

「名前は？」

少女は無言で首を振った。

「何も覚えていないのか」

「……………」

少女は目を伏せた。長い睫毛が震える。

「はい。気が付いたら、あなたがいて……」

「……そうか」

記憶が今後戻るかどうかわからない、それすらもどうでもいいような気がした。彼女は自分と出会い、今ここにいます。それだけのことだ。

「どこか行くあてはあるのか」

念のために尋ねてみるが、やはり少女は首を横に振る。

「言葉は、ちゃんとわかるのだな」

少女はその問いには首を縦に振った。

「それでは……」

紫苑は少女に微笑みかける。こんなふうに自然に微笑めたのは、久しぶりのような気がした。この少女に対しては、何故か警戒心が解けてしまう。怪しいとは思っているのに……彼女の無邪気なさのせいだろうか。それとも彼女の心細そうな様子が、少しかつての自分と似ているからだろうか。何も分からなかった、あの頃。縋るものの何もなかった、幼い頃の自分。澄んだ瞳はまだ何の汚れも知らないのだろう。

「私と、来るか？」

「……………」

少女は即座に頷き、同時に白い両手を伸ばして紫苑の首筋にしがみついていた。肌の表面の体温は奪われているが、それでも少し、暖かい。

「……そうか」

紫苑はその背をばんばん叩いた。

「まあいい。どうせ御門の屋敷は一人で住むには広すぎる」

少女は紫苑の肩に顔を埋めている。離されまいとするかのように、腕には力がこもっていた。

「そうだ。名前が要るな」

その言葉に、少女は顔を起こした。紫苑の眼をまっすぐ見つめる真っ青な瞳。それはまるで。

「……桔梗」

紫苑はぼつりとつぶやいた。彼らの立つ場所の周りに、その小さな花が咲き乱れている。紫苑は少女に言う。

「お前の名は、桔梗にしよう」

「……ききょう。ききょう」

少女は何度か呟いてみて、やがてにつこりと笑った。

「ありがとう！」

「……」

ありがとう 慣れない言葉に紫苑は戸惑うが、やがて気を取り直したかのように前を向いた。

「早く帰ろう。こんなに濡れていては風邪を引く」

「あ……あれ？ ほんとだ。びしょ濡れ」

少女は小さくくしゃみをした。

「どうして？ 雨が降ったんですか？」

本当に何も知らないのだな。紫苑は苦笑する。

「気にするな」

「でも……つくしゅん」

「急ぐぞ」

少女を抱きかかえたまま、紫苑は家の戸をくぐる。月明かりの元で見た屋敷はいつもと違い、ここが自分の家なのだとしみじみ感じさせる暖かさを纏っていた。

「名乗るのを忘れていたな」

紫苑は告げる。

「私の名は、紫苑だ」

「しおん」

「ああ」

「しおん……しおん、しおん」

少女はその名を記憶に刻み付けておこうとするかのように、何度も繰り返しつつやく。甘いあどけない声に名を呼ばれるたび、紫苑はどこかくすぐったいような、面映いような、不思議な感覚を味わうのだった。

第二章

一

桔梗が眼を覚ましたとき、既に日は高かった。一瞬自分がどこにいるのか分からず、辺りを見回す。

静かな屋敷。近くにひとの気配はない。中庭に面した部屋の外からはかすかに緑の香りがした。遠く近く、鳥の囀りが聞こえる。

「お目覚めになりましたか」

「……………?!」

不意に掛けられた声に驚いて飛び上がる。振り返ると、側に美しい女房がひとり、微笑みを浮かべて座していた。萌黄と若葉色の衣が、目にまぶしい。

「あ、あの……」

突然出現した女に桔梗が戸惑うと、彼女は静かな笑みを湛えたまま囁くように告げた。

「私は紫苑さまの式神でございます。桔梗さまの身の回りのお世話を言い付けました」

「は……、はい」

間の抜けた答えを返し、桔梗は頷く。

「まずはお召し物を」

女は一揃いの着物を差し出した。桔梗は紫苑に借りた大き過ぎる衣の袖をたくし上げ、それを受け取る。

「ありがとうございます」

女はふわりと立ち上がり、彼女の身支度を手伝った。女から甘い匂いがかすめる。

「私の名前は、菊と申します」

振り向くと女と視線がかち合って、桔梗はその瞳が黄金色に彩られていることに気付いた。

「菊……さん？」

「はい」

菊は桔梗の着替えを終え、立ち上がった。

「朝食の用意があちらにできてございます」

菊が彼女を先導するように歩む、その足の裏は床についていない。

「紫苑さまがお待ちでございますよ」

「……あ」

その名を聞いて、桔梗はかすかに頬を染めた。

ここが今日からお前の家だ　昨夜、紫苑はそう言った。そして、答えを待つようにじつと桔梗を見つめた。暖かい瞳。優しい瞳。紫の色の中に、自分が映っていた。まだ抱きかかえられたままだった桔梗は、何だかくすぐったくなって顔を紫苑の肩口に寄せ、彼の視線から逃げた。

「行くあてがないのなら、いつまでもここにいればいい」

「はい」

「だが　いたくなくなったら、いつでも勝手に出て行けばいい」
平坦で冷ややかな紫苑の口調に驚き、桔梗は紫苑を見上げた。

「どうした？」

再び向けられた瞳は先ほどと同じ温度を保っていて、桔梗は安堵する。冷たく聞こえた言葉は、そんなつもりではなかったのかもしれない。

「ずっと……居たいです」

桔梗の小さな言葉が耳に届いたのか、紫苑の口元がぴくりと動いた。

「私、きっと何にも思い出せないと思うし」

「思い出すかもしれないぞ」

「いいえ」

桔梗はそう言って微笑んだ。長い間、眠っていた……そんな感覚が彼女の体には残っている。そして　　ずっと、誰かを待っていた。きつと、紫苑を。

「……お前も物好きだな」

そうつぶやいた彼の顔は、少し悲しげで　　けれど微笑んでいた。彼の言葉の意味が、桔梗には分からない。

紫苑は、おそらく桔梗以上に戸惑っていた。異端の存在。禁忌の半妖。そんな自分と、この子供はずっと一緒に居たいという。

まあ、いい。紫苑は口元を皮肉に歪めた。いつか、彼女の気も変わるだろう。いずれ、桔梗は自分の元を去るに決まっている。けれど　　今、少しだけ夢を見ていたい。誰かと共に生きる夢を。自分も誰かに必要とされているのだという夢を。

「秋の夜は、長いからな……」

その声が聞こえたのか聞こえなかったのか、桔梗は彼の胸元で丸まっていた。小さな体温が心地よい。紫苑は何となく、彼女を自分で歩かせる気にはならなかった。手放すのが惜しく、そのまま寝具を用意させた部屋まで抱きかかえて連れて行く。

だが、離れたくなかったのは桔梗も同じこと。そつと床に下ろされた後も、桔梗はじつと紫苑の残像を目で追い掛けていた。

「……………」
「……………」

食膳を前に向かい合い、ふたりはただ黙々と食事をしていた。ひと付き合いの苦手で、元来無口な紫苑は、時折桔梗の方を眺めるものの特に何を言うでもない。桔梗は桔梗で、黙り込んでいる紫苑に自分からは話しかけづらい。陽光の中で見る紫苑は、何故か闇の中で見たときよりも近づき難く見えた。

「……ふう」

彼女が小さく漏らした吐息を聞きつけたか、紫苑が目を上げた。暖かな紫電の瞳と目が合い、桔梗の緊張は緩む。

「昨夜はよく眠れたか」

「はい」

「菊は、ちゃんとお前の面倒を見てくれているか」

「はい！ 菊さん、とても綺麗な方ですね」

「そうか？」

紫苑は無頓着に首を傾げる。

「彼女は式神だからな」

「式神って……」

先ほどは聞きそびれたが、桔梗は式神が何なのか知らない。

「菊は言わなかったのか？」

紫苑は眉をひそめる。

「あれは菊の精だ。うちの庭の菊に宿った、精霊。それと私が契約をしている」

「……契約？」

「式神となつて私の為に働くという、契約だ」

「紫苑は菊さんに何かしてあげるんですか？」

「来秋も我が家で咲けるよう計らってやる」

「……それだけ？」

「それで、十分なのだ」

紫苑は食器を置いた。桔梗は慌てて残りの飯を口に頬張る。

「慌てなくてもいいぞ」

紫苑は笑って白湯さゆを口にした。彼の笑顔はとても優しく、桔梗

はつられて微笑む。だが、彼女はすぐに真顔になった。

「あの……、私も、その」

「うん？」

「私も、ここに居ようと思ったたら式神にならなきゃ駄目なんですか？」

「……は？」

紫苑は意味が分からないというように聞き返した。

「えっと、だから」

桔梗はもじもじと指先を弄いじりながら繰り返す。

「菊さんみたいに、来年もここに居ようと思ったら、紫苑のために働かなきゃ駄目なのかな……って」

「……………」

紫苑はきょとん、としていたが、やがて声を上げて笑い始めた。

「え？ え？」

桔梗は顔中に疑問符を浮かべ、きまり悪げに紫苑を見つめている。

紫苑はやがて笑いをおさめ、彼女の頭にその大きな手を置いた。

「何もしなくていい」

「え……、でも」

「何もしなくていいんだ」

不意にふわつとしたものに包み込まれた。紫苑の身にまとっていた白い狩衣の文様が、今日の前に広がっている。焚き染められた香の薫りだろうか。甘い、どこか懐かしい匂い。緊張に強張っていた桔梗の体から力が抜けていく。小さい子供にするように 事実、桔梗は小さい子供だが 紫苑は桔梗の髪と背中をよしよしと撫でる。

「でも、私……」

「いいんだよ」

紫苑は桔梗の言葉を遮った。

「まだお前は子供だろう。子供は大人に養われるものだ」

「私、子供ですか？」

桔梗は不満げに紫苑を見上げるが、

「子供だ」

紫苑は断言した。紫苑は特別長身だが、彼と比べなくとも桔梗は小さな少女だ。しかし、桔梗が本当に水龍族だとするならば……。知らず知らずのうちに険しい顔になっていたのか、桔梗が心配げに紫苑の顔を覗き込んでいた。煌く銀髪と、光に照らし出された深い湖面のような瞳。

紫苑は表情を緩め、桔梗の肩を抱きなおすとそつと体を離れた。

「とにかく、何も考えないことだ。知恵熱が出るぞ」

「ちえねっ?」

「それも気にするな。さて……、そろそろ私は宮中に参内しなければならぬ」

紫苑は立ち上がり、奥から新たな式神を呼び出した。

「藤野」

「はい」

今度の式神は男の格好をしていて、名の通り藤色の狩衣を身にまとっていた。おそらくは藤の精なのだろう。

「出かけるぞ」

「はい」

しずしずと歩んできた藤野は、ちらりと桔梗を見て微笑む。

「可愛らしい奥方さまで」

「違う」

紫苑は眉をしかめて答える。藤野は笑顔のまま紫苑に頭を下げた。おめでとうございます。藤野が紫苑様にお仕えし始めてから早幾年……藤野はうれしゅうございます」

「だから違うと言つのに」

桔梗はただ一人意味が分からないというように、目を瞬いている。紫苑は藤野に背を向け、桔梗の頭を撫でた。

「少し留守にする。夕暮れには帰って来るが」

「……紫苑、居なくなっちゃうの？」

じんわりと眼を潤ませる桔梗に、紫苑は苦笑した。

「帰って来ると言っているだろう？ 待てるな？」

「……はい」

「菊がいるから、遊んでもらえ」

紫苑は桔梗の髪から手を離した。

「……………」

桔梗の幼い視線が紫苑をとらえ、やがて微笑んだ。少し無理をした。紫苑を心配させまいとしているのだろう、明るい笑みを浮かべて。

「行つてらっしゃい！」

「……………」

初めて聞いたその言葉に、紫苑は戸惑う。ずっとひとりだった。誰かから側に居て欲しいと望まれることも、誰かに帰りを待ち望まれることも、なかった……。

「行つてくる」

紫苑は言つて微笑んだ。それは藤野もついぞ見たことがないほど、自然で優しげな笑みであった。

三

宮中についた紫苑は、打つて変わつて能面のような無表情を張り付けていた。

陰陽博士、御門紫苑。従三位という高位にあるものの、殿上人の視線は決して温かいものではない。ひとにはあり得ぬ紫電の瞳。そ

して、彼の奮う不可思議な力。それはあやかしと同じ妖力であるとされ、忌諱された。都を守っているのは、紫苑であり、彼の力であるのに。

藤野を背後に従え、紫苑は歩みも早く廊下を渡っていく。自分に対する悪意が渦巻いている空間など、早々に脱してしまいたい。

しかし、

「御門どの」

「……………」

声をかけられては立ち止まらぬわけにもいかず、紫苑はむつつりとした顔のまま声の主を見遣った。同じ陰陽寮に属す占星術に長けた老人、菅野が立っていた。紫苑は陰陽寮における最高位の陰陽博士だから、菅野は彼の部下といってもいい。とはいえ、紫苑が陰陽寮の陰陽師の力を借りることなどほとんどない。

「少々、お時間をよろしいですか」

「ああ」

菅野に導かれるまま部屋に入る。何かと陰陽の術に長けている紫苑であるが、占星は専門外だ。その白い眉の下の瞳を眇め、菅野は囁くようにつぶやいた。

「星が、軌道を変えました」

紫苑は尋ねる。

「凶か？ 吉か？」

「わかりませぬ」

菅野は首を横に振った。

「どちらとも言えぬ星にございますれば」

「いつ、軌道を変えた？」

「昨夜。丑の刻一つばかり」

「……………丑の刻、一つ……………」

桔梗を拾ったのがちょうどその時間だったが、まさか桔梗がその星だとは思えない。たとえ、彼女がひとに滅ぼされたはずの水龍族であっても。

「吉凶がはつきりせぬ以上、主上に言上するのも憚られて」
「そうだな」

紫苑は頷いた。

「様子を見ていれば良いのではないか？ その星が今すぐ主上に仇をなすわけではあるまい」

「は」

紫苑に告げて荷が降りたのか、菅野はほっとした様子で頭を下げる。そして 頭を上げたとき、菅野は紫苑をじっと見ていた。まるで何かを試すような……。

「何だ？」

促すと、菅野は低い声で言葉を紡いだ。

「その星 貴方様に近づきます」

「……………」

紫苑の動きが止まる。菅野はゆっくりと続きを告げた。

「どうぞ……お気をつけなさいませ。御門紫苑どの」

「……………」

立ち尽くす紫苑を横目に、菅野は部屋を出て行く。

行つてらっしゃい。紫苑は桔梗のその言葉と菅野の言葉を胸に反芻し、やがて齒をきりりと食いしばった。その唇の隙間から押し出すように、

「……………」それが、どうした」

つぶやかれた言葉を拾ったのは、すぐ側に立つ藤野だけであった。

第三章

五条橋にものけが出るらしい。宮中でそんな噂が流れ始めたのは、紫苑が桔梗と出会ってから十日ほど過ぎた頃だった。

「藤原助友どのも襲われたとか」

「そうじゃそうじゃ。命からがら逃げられたと聞いたぞ」

「牛飼いの童は未だ行方不明じゃと」

「それが三日前のこと。今も臥せっておられるそうな」

「童も食われたのかも知れませぬな」

「恐ろしや」

「いかようなもののけだったのか」

「それは分かりませぬ」

「助友どのも覚えておられぬのか」

「まだそのような話が出来る状態ではありませぬぞ」

紫苑は眼を軽く閉じてそれらの話を聞いていた。

場所は朝議の間。簾の向こうに帝が座るまで、貴族たちは好き勝手に会話をしているが、紫苑には特に話し相手がいるわけでもない。彼に好んで話しかけようとする者も居ないし、彼から話しかけることもない。しかし、こと妖物のこととなると無視を決め込むわけにもいかず、紫苑は聞くともなく彼らの話を聞いていた。

結局のところ、五条橋にものけが出ている、それ以上のことは彼らの話からは得られない。推量や憶測、噂の数々。貴族たちの暇つぶしとも言えるそれらの中に、信じるに値する情報が含まれているはずがない。

「紫苑どの」

不意に声を掛けられ、紫苑は振り向いた。

「は」

声の主は彼と同一年くらいの男で、名を藤原雅哉まへやという。年若い今上の、摂政藤原時雅の長男で、宮中一の貴公子との誉れ高い人物である。

「お話、耳に入りましたでしょうか？」

彼は無闇と紫苑を敵視する他の公卿たちとは違い、あくまでも慇

懃な物腰であった。紫苑は彼に向き直って答える。

「少々は……」

「それで結構。我々はあやかしのことは分かりませぬし」

「はあ」

丁寧な言葉の中に含まれた皮肉に気付きながらも、紫苑は口数少なく同意する。雅哉は微笑を浮かべ、

「それでも、日暮れ以降五条橋を通れなくなったのは事実。陰陽博士である貴方に何とかして頂きたく思いまして」

「畏まりました」

紫苑はそう言い軽く頭を下げる。どうせ大したものわけではあるまい、と思う。何故かひとはあやかしともののけを混同するが、それは全くの間違いだ。もののけを作り出すのは、こころ。闇を恐れ、怨みを募らせ、想いを滾らせる。その念が下等なあやかし、時にはひとをも狂わせ、もののけとするのだ。

あやかしとひととの狭間に生まれるのがもののけ。

紫苑は軽く眉を寄せた。あやかしと、ひととの交わりで生まれる唯一のものがもののけなのか。それでは自分は 半人半妖の自分ももののけだというのだろうか……？

「御門どのがもののけを退治して下さるそうな」

遠くから、雅哉の声が響いてくる。それを耳にして、紫苑はため息をついた。宮中で自分の名が取り沙汰されるとろくなことはない経験上、彼はそのことを良く知っていた。

「おお、御門どのなら安心」

「あやかしのことならわが身のごとく詳しゅうございましょうからな」

湧き上がる悪意に満ちた笑い声。慣れたこととはいえ、紫苑は身を強張らせた。

「お静かに！」

折も折、今上が簾の向こう側に腰を下ろす気配がし、ざわついてきた朝議の間は水を打ったようにしん、とした。紫苑に対する帝の

厚い信頼を慮ってであろつ。

下郎どもが……。紫苑は口汚く胸中に吐き捨てた。

二

ここ数日間ほど、桔梗は菊と二人で昼を過ごしていた。紫苑が留守にしている間、桔梗は屋敷で留守番をしていなければならない。当然、都を出歩くことなどできるはずがなかった。

この日もはじめは菊の奏でる琴の音に聞き入っていた桔梗だが、直に飽きてしまったらしい。

「暇ですね……」

桔梗がつぶやくと、菊は困ったように首をかしげて手を止めた。

桔梗がその身にまとうのは藍色のかさねで、銀の髪によく映えている。これを見繕ったのは実は紫苑自身なのだが、意外な趣味の良さに式神たちは少々驚いた。

式神となった精霊たちが、彼らの孤独な主人に寄せる思いは優しく、深い。菊もまた例外ではなかった。だからこそ彼が桔梗を拾ってきたとき、菊は驚いた。ただでさえ難しい立場にある彼があやかしのそれも今は滅びたはずの水龍族の子供を拾ってくるなど、尋常なことではない。しかも彼は彼女と出会った経緯について誰にも一切語ろうとはしない。また、菊も藤野も敢えて尋ねはしなかった。心配でないわけではないが、主人には主人の考えがあるのだらうと信じてのことだった。

それにこの少女は、警戒心を抱かせるにはあまりにも幼く、あまりにも愛らしく、あまりにも純粋だった。まるで生まれたばかりの赤子のように。

「絵合わせでもなさいますか？」

「……………」

並べられた貝を手に取り、桔梗はつぶやいた。

「紫苑がこの間、これで遊んでくれた」

「そうですか」

菊は微笑む。それは、さぞかし微笑ましい風景だっただろう。紫苑は相変わらず気難しい顔で貝を睨んでいたのだろうか。あの大きな手に、小さな貝はすっぽりと隠れてしまうことだろう。

「もう一度、遊んで欲しいな」

「お暇があれば、きつとお相手してくださいますよ」

「そう？」

桔梗は起き直り、瞳を輝かせる。

「ええ。勿論ですとも」

桔梗に対し、紫苑には保護者の自覚が芽生えているらしい。彼女に字を教え、歌集を与える。衣も見目麗しいものを選び、惜しげもなく買い与えていた。都びとの間に妙な噂が広がらなければ良いのだが。

そもそも、あの方は歌をお詠みになられるのかしら？ 菊はそれがおかしくてたまらない。

桔梗は桔梗で素直に紫苑に言われるまま字を覚え、最低限の作法も身につけた。菊や藤野には少し逆らってみることのある桔梗だが、紫苑の言うことには異議を差し挟まない。

「桔梗さまは、紫苑さまがお好きですね」

「……………」

貝を弄っていた桔梗の手が止まった。

「……………うん」

白磁の肌が薄桃に染まった。赤い顔で菊を見上げる。

「紫苑に言わないでね？」

「いけないのですか？」

「うん」

桔梗は俯いた。

「何故？」

「……紫苑を困らせることになるかもしれないし」

「……………」

「だから、秘密にしている」

「……はい」

菊は微笑んで頷いた。幼い少女の胸に生まれた好意は、まだ恋に分類するには早すぎるものだろう。それでも、大事に育んで欲しい。菊は桔梗の銀髪をそつと撫でる。そして　紫苑さまは、いつまでもひとりでいらっしやるつもりなのだろう。いつもは思わないそんなことを、ふと思った。

紫苑は誰も信じない。ひと、あやかしも、異端の存在である彼を受け入れることはない。この広い屋敷で暮らすのは紫苑と式神のみである。

しかし、桔梗も孤独な身の上には違いない。彼女の属する水龍族は既に絶えたといわれている。彼女の家族や知り合いがどうなったかは分からないが、恐らく生きてはいないだろう。

水龍族を滅ぼしたのは、ひと。

何度となく戦われたひととあやかしの戦いで、数の圧倒的に少ないあやかしたちはその強大な力にも関わらず常に圧されていた。水龍族も四天王と呼ばれたほどの力を誇っていたにも拘らず、結局絶滅に追い込まれた。

あやかしの戦いに、現在最強の陰陽師である紫苑は参加したことがない。彼の裏切りを恐れているのだろうか。そもそも何故ひととあやかしが戦わなければならぬのか、菊にはわからない。紫苑もきつとわからないというだろう。

桔梗とひとの少女との間に、何の違いがあると言うのだろうか。髪の色？　眼の色？　尖った耳？　額に描かれた文様？　何て下らないこと……。菊が小さくため息をついたとき、

「あ」

側に伏せていた桔梗が身を起こした。

「どうされました？」

「うん……」

曖昧に呟いて桔梗は辺りを見回す。

「紫苑が帰ってきた」

抑揚のない口調。眼はどこか中空を彷徨いながらも、らんと輝いていた。まるで何かに憑かれているようだ　菊の背中がぞわりと粟立った。

「紫苑が、帰ってきた」

桔梗はもう一度、繰り返し返す。

「え？」

菊は驚いた。彼自身のかけた術で彼と繋がっている菊ですら感じ取れない気配を、この少女は感じ取ったというのだろうか。半信半疑で桔梗を見つめていると、つと彼女は立ち上がり、廊下を小走りで駆けていった。ちらりと見えたその顔は、既にいつもの幼い表情に戻っている。

「やっぱり！」

廊下の向こうから桔梗の弾んだ声がして、菊はぴくりと体を震わせた。やはり、紫苑の帰りをを感じ取っていたのか　あの少女は一体何者なのだろう……？

「何がやっぱり、だ？」

桔梗に対する時だけに聞かれる、柔らかい主人の声がする。

「さつきちょうど紫苑が帰ってきたって思っで。そうしたら、やっぱり帰ってきていたから」

「そうか」

紫苑は何も疑問には思っていないようで軽く受け流していた。菊の居る部屋の前まで二人は歩みを進め、紫苑は中を覗いた。

「菊」

「はい」

その穏やかな表情に、菊は胸中にあつた不安を忘れることにした。

紫苑は、今この少女とともにあることがしあわせなのだ。彼女は、彼が初めて得た家族のような存在なのだから。

「桔梗は大人しくしていたか？」

袖をぎゅっと掴まえている桔梗の髪を軽く押さえ、紫苑は尋ねる。

「ええ」

菊が頷くと、桔梗はほっとしたように息をついた。

「近々調伏に出る」

紫苑は表情を引き締め、そう言った。

「五条の橋にものけが出るそうだ」

「はい」

菊は口元を引き締めた。紫苑は時に供として式神を連れて行く。その任に当たるのがどの式神かは分からないが、菊はその心積もりをした。

「桔梗、一晚留守にすることになるが、大人しくしているのだぞ」

「……………」

桔梗は虚をつかれた様に黙り込む。

「どうした？」

紫苑が畳み掛けると、桔梗は紫苑の腕をぎゅっと掴んだまま頭を横に振った。

「桔梗？」

珍しく紫苑の言うことに逆らう桔梗に、菊も驚く。

「……………って下さい」

「何？」

紫苑が眉を潜める。桔梗はぱつと勢い良く顔を上げた。

「連れて行ってください！」

「……………」

紫苑がぼかんと口を開ける。その間抜けな表情は、菊にはたいそう面白い見物であった。

第四章

藤原雅哉邸の一角。簾からは夕日が薄く何層にもなって差し込んでいる。

雅哉は彼の異母弟、伴雅と向き合って座っていた。雅哉には幾人もの異母兄弟がいるが、同じ母親から生まれた者は弟の蓮はなしかいない。蓮は今帝の側仕えの蔵人くらひねとして宮中に参内し、雅哉の邸には居ない。

さて、伴雅である。

「兄さま」

低い声で囁くように伴雅は言った。

「いつまであの人妖はけものを宮中にのさばらせておくつもりですか」「どういうことだ？」

雅哉は緩く足を組み、扇で自らに風を送る。

「お分かりのほすですが」

伴雅は底冷えのする目つきで雅哉を睨みつけた。時雅の北の方の息子である雅哉に比べ、妾腹である伴雅は冷遇を受けている。能力はあるが少々狭量だ、と父は伴雅を評していた。

「しかし」

雅哉は扇をぱちん、と閉じた。

「彼への帝の信頼は厚いであろうが」

「今上は誑あやかされておいでなのです」

「言葉を慎め、伴雅」

「……………」

伴雅は五位。紫苑よりも位が下である。おそらくはそのことが伴雅の紫苑に対する敵意をかきたてているのだろう。

「私も彼を好くわけではない」

宥めるように雅哉は言った。

「お前の気持ちも良くわかるのだよ。ひとである父親も誰なのかはわからず、母親はあやかしという。御門家を名乗ることができるの

も養子に入ったおかげだ」

「蘇芳殿も少々短慮でした」

「そうかもしれない」

先代の御門家当主、蘇芳は既に隠居の身である。決して紫苑と折り合いは良くない。

「しかし、だからといってどうする？ 彼を宮中から追い出せとでも言うのか。都を誰が妖異から守るのだ」

「陰陽寮には他にも陰陽師たちがおります」

雅哉はゆつくりと首を横に振った。

「彼らが束になってかかっても彼には勝てまい」

彼は意外と冷静に紫苑を評価している。ただ毛嫌いするだけの他の公卿たちとは異なっていた。

「馬鹿なことを考えるのはやめるのだな。彼に何か落ち度があれば

……考えても良いが」

「……分かりました」

伴雅は低く呟いた。

「彼の監視は怠りません」

「……………」

伴雅の放った忍の存在など、紫苑は気がついていいるかもしれない。

雅哉は紫苑を敵に回したくはなかった。彼のことは好きではないし、半妖という存在を受け入れるつもりもない。だが、都にとって紫苑は必要な人材だ。無駄に敵視するよりは味方に取り込んだ方が良いだろう。

雅哉は再び扇を開く。伴雅を観察しながら、彼はそれで自らの口元を遮った。

長い髪をきゅっと高く結び、背中に垂らす。つややかな黒髪はそつと手で触れてみたくなるほど綺麗だ。白い狩衣の要所を縫いとめる紫の糸は、術で強化されているらしい。手首の数珠は護符で、その袖口には呪符が何枚か入れられている。腰にさしてある小刀も普通の刃ではなく、特別に鍛え上げられたものであった。

桔梗は支度を進める紫苑の側に座りこんで、ぼうつと彼を見上げていた。ひとともあやかしも違う匂いのする彼の隣りは、とても居心地が良かった。隙のない所作、鋭いがどこかに優しさを宿す眼光……。

「桔梗」

「は、はい！」

不意に名前を呼ばれて飛び上がる。紫苑はいつの間にか支度を終え、桔梗をまじまじと見つめていた。

「お前、本当に行く気なのか」

五条橋のもののけを退治しに行くという紫苑に、無理やり同行を頼み込んだのが一刻ほど前のこと。はじめは反対していた紫苑も最後は折れたのだが、それでもどこか心配そうである。

「行きます」

ぐつと唇を噛み締めて頷くと、紫苑はやれやれ、と言った様子で苦笑を浮かべた。

「大したもののおかげでなければ良いのだがな。いざとなればちゃんと逃げるのだぞ。戦えとは言わぬからな」

「は……はい」

桔梗は頷く。

紫苑は緊張した面持ちの桔梗を見つめた。彼女は間違いなく水龍族である。水龍といえばあやかしの中でも最強の妖力を誇る一族で、その殺性は非常に強く、自分に刃向う者を殺すことに罪悪感を持たない。逆に自分の味方は命を懸けて守ろうとする、そのような一族であったといわれている。桔梗は本当にそんなあやかしのだろうか？ 紫苑は自問する。その白く細い手で、本当に誰か

を傷つけることができるのだろうか？

「……紫苑？」

さらに、と銀髪が零れた。

紫苑は首を横に振って彼女から眼をそらす。たとえば彼女の
手が血に汚れても、私はちゃんとその手を取ってやるう、そう思っ
た。一族からはぐれ、たったひとりで生きていかなばならぬ桔梗の
身の上は、どこか自分と重なって見える。

「先に飯だ。その後行く」

紫苑はそう告げて菊を呼び出した。いつもの通りどこからともな
く現れた菊は、首をかしげて紫苑を見る。

「桔梗さまはこのままのご装束でよろしいのですか？　あまり動く
には適さないと存じますが……」

「何？」

紫苑は桔梗を見た。桔梗の大きな青い目が紫苑をとらえる。

「……何を着せれば良い？」

菊に問うと、彼女はふわりと微笑んだ。

「菊にお任せ下さいませ」

「ああ、任せる」

紫苑は照れ隠しのようになり、意味もなく重々しく頷いた。

三

それから一刻ほど後。五条通を歩む三つの人影があつた。紫苑と
桔梗、それに式神である。この式神は菊とも藤野とも違い、名を焰^{ほむ}
という。その名の通り赤がかった髪と瞳を持つ青年で、まとう狩衣
まで赤い。紫苑に流れるあやかしの属性は火。その力により召還し
た式神だと桔梗は聞いた。焰は桔梗を見ない。というよりも、周り
の事物に対して一切関心がないようだった。そういえば声も聞いて
いない。

「……桔梗」

突然低い声が振ってきて、桔梗は顔を上げた。紫苑の仏頂面が眼に入る。

「歩きにくいのだが」

「……すみません」

謝ってみるものの歩きやすくしてやるつもりもないようで、桔梗はしがみついていた紫苑の腕にさらに体重を預けた。

「夜目が利かぬわけでもあるまい？」

「そうですけど……」

桔梗は目を伏せた。

「でも、寒いですし」

今の桔梗は童形の少年のような服装をしている。銀髪も頭頂部で一つにまとめて背中に垂らしていた。確かに軽装だから、少々寒いかもしれない。

「だから家にいると……」

「紫苑は暖かいですね」

皆まで聞かず、桔梗は見上げてにつこりと微笑んだ。

「最初に私を拾ってくれたときも、暖かった」

「……そうか」

紫苑はわざとらしくそっけない返事を返し、宵闇の向こうを見つめた。五条橋は近い。

りん、

と鈴が鳴った。小さな音だったが、それは闇を震わせ、彼らの足を止める。

「紫苑さま」

焰が紫苑を呼ぶ。彼が言葉を口にするのは初めてのことだ。

「ああ」

紫苑は顔を引き締め、桔梗を庇うように袖の中に入れた。

「桔梗。黙ってしがみついている」

「はい」

桔梗は唇を引き結んで紫苑の腕に身を預けた。紫苑の心音が心地よい。

りん、

さらに鈴の音。先ほどより少し大きい。

りん、

徐々に近づいてくる。

紫苑は桔梗を抱いていない方の腕の袖をぱつと翻し、顔の前で印を結んだ。

「……………」

桔梗には意味不明な言葉が彼の唇から紡がれる。訥々とした中にも抑揚をつけて呪を唱える声は、とても綺麗だと思った。

「……………?!」

紫苑が不意に桔梗を抱えたままうずくまる。途端、熱風が彼らに吹き付けた。

「きゃ……………」

思わず漏れそうになった声は紫苑の手に遮られたが、桔梗は大きく眼を見開いてその光景を眺めた。それは、焰が一匹の鳥に 伝説の神獣、朱雀に変化する瞬間。闇を焦がして炎を纏うその姿は、神々しく、雄々しい。

りん、

熱と炎に包まれた中、鈴の音だけが大きく耳に届いて、桔梗はぞつとする。

「桔梗？」

指先が細かく震えていることに気付いたのか、紫苑が声をかけた。「大丈夫です」

桔梗は答えて紫苑にしがみついた。紫苑は黙って彼女を抱えて立ち上がり、橋のたもとへと歩み始める。

「……………」

袖口から取り出した呪符に念を込め、紫苑は橋の欄干四方へと飛ばした。紫苑の頭よりも少し高いほどの位置で呪符はぴたりと静止

し、かつと輝く。

りん、

音が少し変化した。

「橋に結界を張った。もうここからは出られぬ」

紫苑は誰にともなくそうつぶやいた。

「しかし……正体が見えぬな」

上空に静止していた朱雀が羽ばたき、舞い降りてくる。紫苑の唱える呪に呼応しつつ軽やかに動き、朱雀は身を隠しているものけを探した。

りん、

また、鈴の音。紫苑は眼を見開いた。

「朱雀！！」

焦りをにじませた、今まで聞いたこともないような大声。

朱雀が橋の表面に急降下してくる。皮膚がざわめくような痺気を感じ、桔梗が身をすくませたその瞬間、ごう、と強風が辺りを薙ぎ、紫苑と桔梗を吹き飛ばした。紫苑の手が桔梗から離れる。

「桔梗！！」

紫苑の声　まるで悲鳴のような。

桔梗の体がふつと軽くなり、そしてそれは落下を始めた。黒い川面に向かい、真っ直ぐに。……そのとき桔梗の目に映ったのは、女……。固く鈴を握り締めた、女。もう片方の手には……。髪の毛の長い、女の……。首？

桔梗の頭から血の気が引く。首を抱えた女が、裂けた口でにっと笑い　桔梗の頭の中で何かが弾けた。

第五章

「桔梗！」

紫苑は叫んで橋の欄干に駆け寄ろうとした。途端、再び瘴気に吹き飛ばされる。

「ぐっ……」

肩を強打した紫苑は、朱雀に向けて印を結んだ。朱雀が人には聴くことの出来ない咆哮を上げ、炎を生み出す。もののけは怯んだようにあどずさった。

そうか。そのとき、紫苑は思い出していた。

「お前は……華子！」

数ヶ月前　とある男の妻が大病に伏せた。いよいよ命の灯火が尽きようかというときになり、彼女は夫と約束を交わした。決して再び正室を迎え入れることはない。

瀕死の正室は鈴を所望し、やがてそれを握り締めたまま事切れた。男はその後しばらくは独り身を通したが、彼がまだ若かったこともあり、周囲がそれを許さなかった。やがて若い後妻が屋敷に入り殺された。首をもがれるという無残な死に様で。そのとき周囲の者が聞いたのは後妻の悲鳴ではなく、ただ鈴の音。

あの正室の名は確か、華子だった。後妻を殺しただけでは飽き足らず、その妄念が凝り固まったままもののけと化したらしい。

「……ちっ」

川に落ちた桔梗が気になるが、水のあやかしである彼女が溺れ死ぬなどということはあるまい。とにかく、先にもののけを調伏しなければ……紫苑は心を決め、呪符を取り出す。もののけも彼の気配を察したらしく、瘴気を強めた。

「……………」

紫苑が最初の一音を発したのと、川面が爆発したのとは同時だった。

二

川面に落ちた桔梗は、そのままずつと下に沈み込んだ。

「っ……！」

冷たさに身をすくめるが、水は彼女を優しく受け入れた。この感じを、私は知っている。桔梗は気付いて眼を見開いた。彼女の着ていた衣が徐々に落ちていき、彼女は薄物を一枚纏っただけの姿となる。力を抜くと、体はそのままゆらゆらと水の中を漂った。

この感じ……。桔梗は目を閉じる。髪を揺らす波紋。指先をすり抜けていく泡。肌に馴染む水温が心地よい。

昔、私はこの中にいた……。誰かを待っていた……。

とくん、

とくん、

体を丸め、自分の鼓動に耳を傾ける。私は 誰かを待っていて、

そして……。

桔梗！

水を響かせる強い声。彼女を見つめる優しい紫の瞳。

桔梗！

どくん、

「しおん……」

桔梗はつぶやき、目を開ける。彼女の体の中で何かが爆発した。

三

ざあつ、と水柱が立ち上がり、水面に叩きつけられる。まるで、突然空中に滝が生じたようだった。

「なっ……っ?!」

水を苦手とする朱雀は空高く舞いあがって、警戒の声を上げた。

「これは……」

凄まじいまでの妖気が空間を席卷する。紫苑の皮膚までもがぴりぴりと痛みを感じた。もののけはその醜い姿を橋のたもとに隠している。

やがて水柱が消え　上空にゆったりと浮かぶあやかしの姿があらわになった。

長く、白い手足。腰までも伸びた銀髪。額の青い印と、青水晶のように輝く瞳。弧を描く赤い唇　。

「き、きょう……？」

紫苑は呆然と呟いた。

まるで違う　まるで違う気配をまといながらも、それは桔梗だった。桔梗でしかあり得ない。だが、その体は成熟したおんなのものだ。

「何故……何故いきなり成体に？」

声音が震える。

水龍族の成体　彼らは「水の殺戮者」と呼ばれていた。そのふたつ名は、邪魔なものは見境なく殺すというその苛烈な性質から付けられたもので、伴侶を得た一人前の成体ではよりその傾向が顕著となる。その非常に強い殺性は、同じあやかしたちからも恐れられていたという。その水龍が　ここにいます。

「……………」

「桔梗」はふわりと笑った。何の屈託もない、純真な笑み。紫苑の視線が吸い寄せられる。

「……桔梗」

唇が勝手に彼女を呼んだ。

すらりとした足が空を蹴り、「桔梗」は紫苑の側へと降り立った。薄物一枚を纏っただけの体は、その大人びた体型をくつきりと浮かび上がらせている。

「紫苑」

澄んだ声は、桔梗と同じ。

「少し待っていて」

「桔梗」の唇が艶やかに微笑んだ。

「すぐ片付けるから」

「桔梗！」

とどめようとした手を、彼女のひんやりとした指先が握った。眼を合わせると、「桔梗」は少女めいた笑みを零す。その純真さと残酷さは、紙一重だった。紫苑は体を強張らせる。

「その名前……、『私』も気に入ってるの」

くすくすと微笑みながら、「桔梗」は紫苑の手を離した。

「待っていて」

隙をうかがっていたのか、もののけが「桔梗」に向かって突進した。溢れんばかりの瘴気と、彼女 既に華子ともいえない、もののけを核として吐き出されてくる悪霊たち。その勢いたるや凄まじいものがあるが、「桔梗」は慌てることなくゆっくりと向き直った。紫苑をとん、と後ろに押しやり、彼女は真っ直ぐに手を振り上げる。

「……切り裂け」

彼女の言葉に従い、川が狂った。どつと逆巻いた川面から刃のような水が打ち出され、橋の中央はずたずたに切り裂かれる。同時に、もののけの体はあっけなく四散した。

おおおおおおおおおおおお！！

大気が震える。

逃れようとする小さな悪霊たちまでも水は捉え、引き裂いて粉々にした。どす黒く濁っていた水の色も徐々に澄んで、やがて 全てが消える。呆気ないまでの殺戮。紫苑が除霊を行うまでもなく、もののけは 華子は 消滅した。

「……もう終わりか。呆気ない」

「桔梗」はつまらなそうにつぶやいて、呼び寄せた水を返していく。

「下等なものけだった、というわけか」

「桔梗……」

紫苑は乾いた喉から、どうにか声をしぼり出した。

「お前、どうして……」

「成体になったかって？」

振り向いて眼を覗き込まれる。普段よりもずっと身長が近づいたせいで、「桔梗」の顎が紫苑の胸元に触れていた。

「簡単なこと。この体にはふたつの人格が棲んでいるの。……こちらの『私』は嫌？」

「そついうわけではない」

紫苑は首を横に振る。

「ただ、……その、よくわからない」

「桔梗」は少し眼を見開き、やがて口元を緩めた。

「そつ」

「教えてはくれないのか？」

「教えることなど、何もない」

「桔梗」は艶やかに微笑む。

「私たちはふたりとも 貴方が名づけたとおり、『桔梗』なのだから」

「何故、お前はふたつの人格を持つ？」

「必要だから」

「何のために必要なんだ？ お前は一体」

「そんなこと、今はまだどうだっていい……」

「桔梗」はそつつぶやくと、少し背伸びをした。

「良くは……ない、が」

「桔梗」の水色の瞳に追究を拒絶する色を読み取り、紫苑は語尾を濁した。

「だが、聞かれたくないなら聞かないでおく。お前が必要だと思うときに話してくれればいい。それでいいか？」

「桔梗」は嬉しそうに笑って頷いた。そんな表情はいつもの桔梗と良く似ていて 紫苑は困惑する。

「お前も、桔梗なんだな？」

確かめるように尋ねると、彼女はこくりと頷いた。

「それだけがわかっていれば、十分だ」

紫苑は力を抜いてそうつぶやいた。 水龍の殺性を知らなかったわけではない。それでも、自分は彼女を手元に置こうと思った。守ってやろうと思った。それならば最後まで責任を取りたい。桔梗と「桔梗」は外見も中身も異なっている。それでも 彼女の中にある孤独は変わらないのではないか。そんな気がした。彼の中の孤独と惹きあうものを感じる。そして それ以外にも、何か……。

「紫苑」

「桔梗」の声に、顔を上げる。と、不意にその唇に柔らかいものが押し付けられた。

「……………」

眼前にある閉じられた瞼は、銀糸のような長い睫毛に縁取られている。彼女の細い指が紫苑の長い黒髪を優しくなぞった。

「……………」

紫苑はやがて眼を閉じ、「桔梗」の背中を優しく抱擁した。子供を宥めすかすような動作だが、彼女は気持ちよさそうに彼に凭れる。

「……………私は」

「桔梗」がつぶやく。

「私は、ずっと貴方を待っていた」

ずっとずっと、あの場所で。

「水龍の皆が死んでも……自分自身の記憶を失っても」

貴方を待っていた。

「それは、仕組まれていたこと」

彼女はゆっくりと眼を開けて紫苑を見上げた。

「私たちの運命」

「運命……？」

「もうすぐこの世界は大きく変化を遂げる」

「桔梗」はまるで預言者のように言葉を紡ぐ。

「そのために私はいる。もう独りの桔梗に、まだこの定めは背負え

ないから」

独りで扱うには、この妖力は強大すぎる。彼女は言い換えた。
「貴方も運命の齒車のひとつ。大きな、中心となる齒車」

「……………」

「私も同じ。私たちが出会ったのは、運命……………」

「いや」

紫苑は首を横に振った。

「違う。私はお前に呼ばれた、だから出会ったのだ。運命に呼ばれたのではない」

「……………」私か、呼んだ？」

「そうだ」

「桔梗」の瞳が揺れる。

「運命などに呼ばれて、誰が行くものか」

紫苑は毅然とそう言い放った。それは、彼がいつも自分に言い聞かせてきたこと。どれだけ孤独でも、どれだけ辛くても、どれだけ疎外されても。

「私は私のしたいように生きてきた。これからずっとそうだ」

だから、

「お前もそうしろ」

「……………」

「桔梗」は微笑んだ。意図のつかめない、底冷えのするような笑み。

「私が、怖くない？」

唐突にそんなことを尋ねる。

「私は貴方を殺すことができる」

「……………」

紫苑は黙ったままそれを認めた。どんなに彼が優れた陰陽師であっても、彼女には勝てないだろう。彼女は普通のあやかしではない。いや、おそらくは普通の水龍ですらない。あの残酷な戦い方。全てを洗い流してしまう様子は戦慄を誘うものだった。確かに、

紫苑には彼女を恐れるだけの十分な理由がある。しかし……。

「怖くない」

紫苑は彼女をそっと抱きしめた。

「お前を怖がることなどない」

「桔梗」は為されるがままに紫苑の胸に顔をうずめる。

「世界中の皆がお前を怖がっても、私は怖がってなどやらない」

恐れられるということは、孤独だということだ。紫苑はそれを良く知っている。自分は人から常に恐れられてきたのだから。

「お前が桔梗なら　怖がる理由など何もない」

「………」
「桔梗」は深い吐息をついた。

「………」
何事か囁く。だが、紫苑の耳はその言葉を捉え損ねた。わざとかもしれない　「桔梗」はそれを、聞かれなくなかったのかもしれない。なかった。

第六章

—

桔梗が眼を覚ましたとき、既に夜明けが近かった。

「……あれ？」

身を起こして首を軽く振ってみる。銀髪がぱらぱらと頬にかかった。

「私………」

そうだ。私、あの時川に落ちて……落ちて、その後どうなっ

たんだろう……。

「紫苑……？」

辺りを見回した視線がぴたりと止まる。彼女の眠っていた寝具のすぐ側、壁にもたれかかるようにして紫苑が眠っていた。結った髪も解かず、服も昨夜のままだ。ずっとここに居てくれたのだからうか。桔梗の側で、一晩中見守って……。式神に任せるともせず、紫苑自ら彼女の傍らについてくれたのだろうか。

「紫苑」

そつとつぶやいて、桔梗は紫苑の俯いた顔に手を伸ばす。指先が触れるか触れないかの距離まで近づいたとき、紫苑が小さく身じろいだ。はつと桔梗が手を引っ込める。

紫苑の紫電の瞳が開いた。

「桔梗？」

紫苑は身を起こして桔梗の肩に触れる。

「大丈夫か？」

「はい！」

心配そうに尋ねる彼に、桔梗はぶんぶんと首を縦に振って頷いた。

「でも、あの」

桔梗は口ごもる。

「私……昨日のことあんまり覚えてなくて」

「……………」

紫苑は黙って桔梗を見返した。

その後、「桔梗」はあっさりと身体の支配権を手放した。まだ時期ではない、という言葉を残して。

川に落ちたはずなのに濡れもしていない体を　そしてあつという間に幼い少女となった体を抱きとめ、紫苑は暫し黙然としていた。

運命など信じない。「桔梗」にはそう言い放ったが、実のところ気にならないわけではなかった。桔梗と出会ったときの不思議な体験。菅野の警告めいた星見。そして、「桔梗」　私には貴方

を殺すことができる。そう聞いても自分は動揺しなかった。むしろ、それならそれでいいとさえ思った。私の居場所はこの世界にはないのだから。だが、それは桔梗も同じかもしれない。そう　私たちはきつと、良く似ている。

「紫苑？」

間近で覗き込まれて紫苑はどきりとした。昨夜の柔らかな唇の感触が蘇り、さつと顔に朱が指す。

「どうしたんですか？」

「いや……」

紫苑はやりわりと首を横に振った。桔梗が昨夜のことを覚えていないのなら、わざわざ教えるまでもない。

紫苑は言葉を選んだ。

「昨夜お前が川に落ちて、もののけは、その……私が退治して」

「紫苑が私を助けてくれたの？」

桔梗の青い瞳がきらきらと輝いた。

「そ……そうだな」

自分でも下手くそな嘘だと思ったが、桔梗はあっさりと信じたらしい。

「ありがとう、紫苑」

桔梗はそう言って微笑んだ　「桔梗」と同じ微笑だった。

二

自分の部屋に戻り、紫苑は昨晚を思い出す。　眠り込んでいる桔梗を抱えて帰宅する途中、焰が言ったのだ。

「そのあやかし、ふつうのものではありませんね」

「どういうことだ？」

紫苑が振り向くと、焰はその無表情な顔に僅かな緊張を浮かべて

いた。

「先ほどの『彼女』の妖力の波動に、私は覚えがあります」

「何だと？」

紫苑は足を止めた。

焰は　朱雀は、最強の霊獣である四聖獣の一である。

朱雀。青龍。白虎。玄武。それぞれが火族、水族、風族、地族の守護獣であるとされている。

己にふさわしいと認める者による召還にしか応えることのない霊獣たちで、大抵の人間たちは伝説だと思っているし、あやかしもそれは同じだろう。

だが、彼らは確かに実在する。現実には、朱雀は紫苑を主と選んだのだから。

朱雀　焰はうなずいた。

「『彼女』の波動は、青龍のもんです」

「何だつて……？」

紫苑は眉を寄せた。

「青龍の？」

「ええ」

焰は頷いた。

「恐らくこのあやかしは、その魂に青龍を宿している」

「……………」

紫苑は口をつぐんだ。　そんなことがあり得るのだろうか。魂に霊獣を宿すなどと、そのようなことが。

焰は彼の疑問を悟ったのか、淡々とした口調で説明した。

「水龍は、青龍とのつながりが深いのです……………」

元々水龍は謎の多いあやかしであった。だが、ほぼ絶滅してしまったと思われる今ではそれもはや知る由もないことである。

「彼らの中には、『御子』と呼ばれる個体が生まれることがある」

「…………『御子』？」

それは、紫苑も初耳だった。

「圧倒的な妖力を持ち、一族を統率する次代の長となるあやかしです」

「それが、青龍を宿すのか」

「いえ」

焰は首を横に振った。

「今までにそんな例はない」

青龍は四聖獣の中でも特に力の強い霊獣である。その霊力を制御できるあやかしなど、今までいなかった。

「青龍は……常に誰に属することもなかったのですが」

しかしあの波動は青龍のものだ、と焰は言った。紫苑はじつと考え込む。もし焰が言うことが本当だとすると、それではあの桔梗が水龍の「御子」だということだろうか？ 一族が滅ぼされた後も「御子」である彼女だけが死を免れたということか？ そして、私を待っていたのか？

腕の中の桔梗をぎゅっと抱きしめた。

「『運命』だと言ったな」

紫苑は小さく囁いた。

「それは私たちを苦しめるものなのか？ それとも……」

力を失った華奢な体は何も答えない。それとも、私たちを新たな道へと導くものなのか？

「むしろ両方かもしれない……な」

紫苑はつぶやき、歩みを再開した。もう、立ち止まるつもりはなかった。

「……………」

ぼつと庭を見遣っていた紫苑は気配を感じて振り向いた。視線の先には桔梗が顔を覗かせている。

「どうした？」

尋ねると、彼女はふるふると首を横に振った。

「何でもないんです。けど」

「けど、何だ？」

「側に行ってもいいですか？」

「……………」

紫苑は微笑んだ。

「ああ」

桔梗は嬉しそうに笑って彼の側に腰を下ろす。甘い香りが鼻を掠めた。

「綺麗な空ですね」

桔梗の声に、紫苑は上を見上げる。改めて眺めた空は、深く澄んで 美しかった。きっと、彼女に言われなければ気付かなかっただろう。

「……そうだな」

紫苑は呟く。

「綺麗だ」

こんな時間が続けばいい。

紫苑は頼りなげな桔梗の肩にそっと手を置く。白い雲の軌跡を辿れば、青い天球の形がなぞれそうだと思った。

ひとりでいることは嫌いではない。それなのに、今こうやってふたりでいることをとても心地良いと思う。まるでずっと昔から彼女を知っていたかのような、不思議な安心感。どこか境遇が似通っているからだろうか。根深い孤独を共有しているからだろうか。どんなにその存在が謎めいていたとしても、彼は構わない。ただ一緒に、こうして空を見上げて。

「ねえ紫苑」

桔梗が甘えるようにもたれかかってきた。

「今日はお出かけしないんですか？」

「ああ」

短く答えると、桔梗は嬉しそうに笑って、
「だったら、遊んでくれますよね？」

「……何がいい？」

紫苑は向き直って尋ねた。

「何がしたい？」

桔梗はしばらく考え、やがて微笑んだ。

「何でも！」

紫苑といられるのなら、何でも……。

三

御門蘇芳はその日、藤原伴雅の屋敷を訪れていた。蘇芳は紫苑の先代の御門家当主で、かつての陰陽博士である。隠居の身である彼が突然呼ばれた理由は分からないが、何故この若造に呼びつけられなければならぬのかと思うと少々腹立たしい。

「わざわざお越しいただいてありがとうございます」

伴雅はゆったりと微笑んだ。

「いえ」

蘇芳は短く答える。伴雅は扇を軽く揺らしながら尋ねた。

「最近、ご子息とはお会いになるのですか？」

「紫苑と、ですか？」

蘇芳は一瞬視線を上げ、再び下ろした。

「会いません」

彼はあの青年が苦手だった。先帝の命により紫苑を養子にはしたものの、結局半人半妖という彼の存在を受け入れられなかった。紫苑もそれは十分承知しており、幼い頃から養父である自分に甘えるということをしなかった。それが余計にふたりの溝を広げ　結果、今では完全に他人同士になってしまった。

「では、最近のご子息の様子もご存知ではないと？」

「ええ、全く」

蘇芳は伴雅を見据えた。かつて陰陽博士であった頃と同じ、鋭い

視線が伴雅を射る。伴雅はさすがにうろたえた様子で視線を逸らした。紫苑であれば、必ず受け止めていたものを。不意に浮かんだそんな考えは、続いた伴雅の言葉に打ち破られた。

「ご子息が今、あやかしを屋敷に住まわせていらっしやるのをご存知ですか」

「……は？」

蘇芳は聞き返した。

「あやかし……ですか？」

紫苑は人間から受け入れられてもいないが、決してあやかしと近しいというわけでもない。式神の間違いではないか、という顔をする彼に、伴雅は追い討ちをかける。

「それも水龍族と思われる少女です」

それは、彼が御門邸に放った忍から得た情報だった。蘇芳はすぐさま言葉を返す。

「そんなはずはない。水龍は滅びたはず」

「しかし銀髪に青い眼……そして額の文様。全てが水龍の特徴だったそうですよ」

「……」

蘇芳は黙り込んだ。

「紫苑殿は未婚でしたな？ 養子のおつもりでしょうか？」

伴雅は軽い口調で言う。

「しかしお上に楯突いた存在であるあやかしを家族に迎え入れるとは……少々軽率ではありますまいか」

「……」

「お疑いならご自身でお確かめください」

「……」

蘇芳は視線を落としたまま答えない。

「このことは未だ、私ひとつの胸にしまっておきましょう」

「……ありがとうございます」

紫苑が罪を得れば、蘇芳もただではすまない。伴雅は頭を下げる

蘇芳を満足げに見遣った。

「それで……、ひとつ、お願いを聞いていただきましょうか」

「お願い……？」

顔を上げた蘇芳に、伴雅は微笑みかける。

「ええ。それほど難しいことはありません。まじないです」

「まじない……」

まじない。呪い。蘇芳は鸚鵡返しにつぶやいた。伴雅は言葉を続ける。

「そう。そしてまじないは、のろいとも読み替えることができる」
のろい。呪い。

「私のお願いを、聞いていただけますな？」

「……………」

蘇芳はのろのろと頷いた。頷くしかなかった。

「御意」

伴雅の巻

第一章

—

からから、と。通りを牛車の進む音がする。濡れ縁で書物をめくっていた紫苑は、軽く顔を上げて音の方向を探った。誰か、自分に用事がある者かもしれない。

都で怪異が起これば、大抵は自分のところに持ち込まれてくる。それが公のものであれば宮中にて相談を受けるし、私的なものであれば　こうして屋敷を訪れてくるのだ。

秋が進んで屋敷の中庭は淡い枯れ草色になっている。紫苑はそこに視線を落とし、ため息をついた。

「菊」

呼ぶと、ひとりの女房が音もなく彼の背後に現れ、畏まる。

「お呼びですか？」

「桔梗を連れて奥に行っている。彼女が見つかると思介だ」

「はい」

菊は頷き、姿を消した。

「……………」

紫苑はもう一度ため息をついた。桔梗と出会ってから、既にひとつきが経つ。平穩に日々は過ぎていたが、それは実際まだ何ごともありこつていないというのと同義だった。桔梗のこと、水龍のこと。

彼女のうちに潜む青龍の魂のこと。そして　自分のこと。何も明らかににはなっていない。

「紫苑さま」

季節が移り、藤野は役目を終えた。代わって現れたのがこの式神、

馨である。

「ご来客です」

「誰だ？」

「女の方ですが」

「……女？」

紫苑は眉を寄せた。

「名乗らぬのか？」

「はい」

「……通せ」

紫苑は袖を払って立ち上がる。藤色の衣がはさ、と音を立てた。

女は部屋に用意されていた帳の向こう側に座っていた。こちらから窺えるのは衣の裾だけだが、かなり高級な服地であることが分かる。貴族の子女、か。

「突然お伺いして申し訳ありません」

女は深々と頭を下げたようだった。声の調子からすると、紫苑より少し年上かも知れぬ。

「いえ」

紫苑は言葉短かに告げると、正面に腰を下ろした。

「……さて、お話とは何でしょう？」

女は躊躇うように身じろいだ。

「あの、内々にお願いたく思いました……、今からお話することは、どうぞお胸のうちに」

「承知しております」

紫苑は無表情に告げる。声から自分への不信感がまざまざと感じられて、不愉快だった。私がひとではないからか。相手に見えぬことをさいわいと、紫苑は苛立ちもあらわに顔をしかめた。

「……」

長い沈黙をはさみ、やがて女は口を開いた。

「まじない、を」

一度息を呑むような気配の後、

「まじないを解く方法はありませんか……？」

思いつめた調子で問うてくる。

「……………」

紫苑は眼を細めた。

「つまり、呪い^{のろ}を解く方法を知りたいというのですね？」

「は……はい」

「その質問に答えるためには、幾つかこちらの問いにも答えていただく必要があります。差し障りのない範囲でお答えください」

「……はい」

「呪いを掛けられたのは誰です？」

「……………」

再び長い沈黙の後、女はぽとりと言った。

「藤原雅哉様」

「掛けたのは？」

「……それは、お許しくださいませ」

「術者の名前をお聞きしたいのです。依頼者ではありません。呪いを掛けるのにも鍛錬が必要、それなりの力を持った者が請け負っているはず」

「……………」

躊躇う女に、紫苑は言葉を重ねた。

「術を解くためにはそれが必要なのです。早めに解決すれば、この件そのものを明るみに出さずに済むのですよ」

「……………」

「術を失敗すると、依頼者に累を及ぼす可能性もある。ご存知ですか？」

「まさか……！」

女は大声を上げた。

「本当です」

対照的に静かな声で紫苑は言う。

「……でも」

女は苦しい呼吸になって、

「でも、陰陽師の方であれば……きっと、上手にやって下さっているはずですわ」

「……陰陽師？」

紫苑は聞きとがめた。

「陰陽寮の陰陽師が？」

陰陽博士である彼が統治している陰陽寮。その中の者が彼に断りもなく危険な呪いを行うとは考えがたい。何しろ、紫苑は彼らの生年月日と出生地を把握しているのだ。生殺与奪の権を彼に握られているのも同然である。それが、何故こんなことを……？

「いえ、違います」

女は覚悟を決めたのか、張りのある声で言った。どこか、紫苑を責めるような響きも伴って、

「術者は御門蘇芳さま。貴方様のお父様でいらっしゃいます」
そう、言い切った。

二

女の泣き声が聞こえる。彼は夢うつつにその声を聞いていた。聞き慣れた、懐かしい声。だが、同時に胸を締め付ける悲しい声。

自分にはどうしても泣き止ませることができなかった、母の声。鷹狩で沢山の獲物を獲って帰ってきてても、詩文で先帝より直々に褒められても、母の涙は涸れることはなかった。

彼は父親に家で会ったことがない。彼が生まれた後、妾であった彼の母親の家に父親は寄り付かなくなった。

兄のことを彼に教えたのは母親だった。そのときは何ということもなく聞いていた。成人して宮廷で会ったときも特に何とも思わな

かった。兄は腹違いの弟をちゃんと弟として扱ってくれたし、時には彼の才能を素直に賞賛すらしてくれた。あのまま普通の兄弟になれば良かったのに。心のどこかで、そう思っている。それなのに……。

「兄上が悪いのだ」

伴雅はつぶやいた。文机に散らした書類を押しやり、頭を抱える。「貴方が私の邪魔をするから」

その存在全てが目障りになった。自分より常に上位にある彼が、いつだって少しだけ優位に立つ彼が。

「邪魔なんだ」

私の劣等感を刺激するから。

「きっと母も喜ぶ」

今は亡き母親を思った。

「母があれば憎んだ女の子供なのだから」

だがその女の姪が私の正妻なのだと知ったら、貴方はどう言うのだろうか。

「私は、愛している」

兄も妻も母も、愛しているのだ。そんな彼がただ一人、愛せないもの。それは、

「私自身だ」

伴雅は絞り出すようにつぶやいた。そう　これは儀式なのだ。私が私を愛せるようになるための。

三

女が帰った後、紫苑は鳥型の式神を飛ばして彼女のあとをつけさせた。依頼者の名は要らないと言ったのは、嘘である。

「しかし……蘇芳が」

彼はつぶやき、苦笑した。蘇芳のことを父上と呼ばなくなったの

は、いつからだろう。実の父親ではないし、父親だと思ったこともない。蘇芳が欲しかったのは、御門家の家督を継ぐ優秀な陰陽師で、紫苑自身では決してなかった。家柄を存続させるためにはひとではない紫苑を手元に置くことすら厭わなかったという、ただそれだけのことだ。それほどまでに家柄に固執していた彼が、何故今になってこのような危ない賭けに出たのだろうか。

誰が何と言おうと、藤原雅哉はときの実力者である。恐らく彼の父親が隠居すれば、次に実権を握るのは彼であろう。事実、彼の妹のひとりには既に中宮として参内している。そんな彼に呪いを掛けて、ことが露見すればただでは済まない。

「どういうことだ」

視線を落とす。

「蘇芳を動かしたのは、一体誰なんだ」
想像もつかない。

この件は厄介なことになりそうだ。じつと考え込んでいると、背後からさらさらと衣擦れの音が近付いてきた。

「誰だ？」

無愛想に問いかけると、足音がぴたりと止まる。

「……………」

無言が気になって振り向くと、そこには桔梗が立っていた。彼女の怯えたような表情を見て、紫苑は慌てて表情を緩める。

「すまない、少し考え事をしていた」

「……………」

首を左右に振り、桔梗はほつと息をつく。

「お客様だったんですか？ 珍しいですね」
と言つて紫苑の隣りに座った。

「そうでもないぞ。ややこしいことになる、途端に他人の力を借りようとする輩は多いからな」

「ふうん……………」

桔梗は頷いて宙を見上げ、ふと、思い出したように紫苑を見た。

「菊さん、もう少ししたらいなくなってしまうんですか？」

「何？」

紫苑は聞き返す。桔梗は目を伏せた。銀色の長い睫毛が小さく震える。

「藤野さんもいなくなってしまうたし……、菊さんももうすぐお役目を終えるって言うてたから」

「……ああ」

紫苑は頷いた。精霊とはその力の強い季節の間だけ契約を結んでいる。秋も深まってきたことであるし、菊はそろそろ消える頃だろう。無論、来年の同じ季節になればまたまみえることになるのだが。

「また、来年会える」

「でも」

「死ぬわけではない。しばらく眠るだけだ」

「……」

桔梗の手が紫苑の袖をつかんだ。悲しげな瞳の色に、紫苑は眉を寄せる。

「どうした？」

桔梗は首を曖昧な方向に振り、俯いた。

「知ってる人がいなくなってしまうのは……寂しいことだから」

「……」

「私の知ってる人は、紫苑と藤野さんと菊さんだけで……、最近皆さんとも知り合いになれたけど、でも」

やはり、一番付き合いの長い式神は菊だった。

「そうだな。……お前が寂しく思うのも無理はない」

「……」

「だがな、桔梗」

紫苑は桔梗の頭に手を載せた。

「世に出会いと別れはつきものなのだぞ。一々心を痛めていては、身がもたない」

「……はい」

「式神たちはまた会える。心配するな」

「ねえ、紫苑」

桔梗は紫苑をじっと見上げた。

「紫苑はずっとここにいるよね？ どこにも行かないよね？」

紫苑との別れなんて、ないよね？ 真摯な青い瞳に見つめられ、紫苑は瞬いた。やがてゆつくりと頷く。

「……ここにいるさ」

私には他に行く場所もないのだから……。その言葉を、紫苑は胸の奥深くに仕舞い込んだ。

ちょうどその時、羽音と共に式神が帰ってきた。紫苑はそれを手に止まらせ、声にはならぬ報告を聞く。

「……何？」

彼の顔色が変わった。

「紫苑？」

桔梗の声が耳に入っているのか入っていないのか、紫苑は顔をしかめて顎に手をやる。

「……これはほんとうに、厄介だな」

彼の脳裏に男の顔がよぎる 藤原伴雅。

第二章

—

暫く考え込んでいた紫苑は、やがて手を高く打ち鳴らした。どこからともなく現れた黒衣の男が、中庭に畏まる。紫苑は口の中で呟くように、彼に何事か囁きかけた。

「……承知しました」

男は低い声で頷き、その場を立ち去る。桔梗は不思議そうにその

背中を見送った。

「紫苑、あの人は誰？」

「あれも式神だ。名は羽櫻^{はおう}。真の姿は鴉なのだが、この庭で子育てをすることを許した代わり、こうして一族の長が仕えてくれる」

「からす……」

「桔梗」

紫苑は彼女に向きあうように座り直した。

「呪いとは、何だと思う？」

「呪いって、憎い相手に何か良くない事を起こすために行われるものの……ですね」

考え考えしながら、桔梗は言う。だが、紫苑は緩く首を横に振った。

「呪いの本質は、もっと別のところにあるのだ」

「別……？」

「そう」

紫苑は桔梗のふつくらとした掌に、「呪」という文字を書いた。

「ひとが誰かを呪う時、その者は必ず無意識の内に自分をも呪っている」

「自分を……？」

桔梗の長い睫毛が瞬いた。

「どういうことですか？」

「……………」

紫苑は少し眼を細めて桔梗を見つめる。

「できればお前にそのような感情を知って欲しくはないと思うよ」

「……………」

大きな手が桔梗の銀髪をくしゃくしゃと撫でた。

「自分を呪う気持ちほど、どうしようもないものはない」

「自分を、呪う？」

桔梗の青い視線が紫苑を捕らえる。

「つまり、自分を憎むということだ」

「……………」

彼女は少し首を傾げて何事かを考えたようだった。やがて、ぽつりとつぶやく。

「もし紫苑が自分のこと嫌いになりそうになっても」

一度言葉を切り、はにかむように顔を伏せた。

「私は、紫苑を嫌いにならないから」

「……………」

「だから、その……………」

顔を赤らめて深くうつむく彼女に、紫苑は苦笑した。

「………… 大丈夫だ。私は誰のこととも呪いはしない」

「うん」

腕にしがみつく暖かな温度。紫苑はそれを受け止める。

たとえ自分を愛せなくても、私は大丈夫。今までも、これからも、私は愛などなくても…………。

「紫苑？」

桔梗が顔を上げる。

「………… いや」

紫苑は首を振った。

「何でもない」

桔梗は紫苑をじっと見つめる。その横顔はひどく寂しそうで、桔梗はぎゅっと彼の手を握りしめた。

二

紫苑の元を辞した羽櫻は身を翻して烏の姿へと戻り、藤原雅哉の屋敷の屋根に止まった。黒く澄んだ眼が、じっと中の様子をうかがう。

「雅哉さま」

彼の北の方の声が聞こえ、羽櫻は耳を傾けた。

「ご気分はいかがでいらつしやいます?」

妻に付き添われるようにしてようやくと中庭に出てきた雅哉は、やや蒼白い顔をしていた。

「……ああ、今は少し良いようだ」

霊鳥である羽櫻が近くにいてことで、呪いの波動が少しは中和されているのだろう。しかし、完全には打ち消せていない　羽櫻は喉の奥で小さく鳴いた。

「流行り病ではない、と薬師が申しとおりましたが」

「ああ、流行り病の症状とは明らかに違う。それに」

雅哉は眉を寄せる。

「何かが……おかしい」

「何がです」

「……………」

雅哉の目が羽櫻を捕らえる。だが、それは一瞬のことですぐに眼は逸らされた。

「近頃、夢を見るのだ」

「夢を?」

「ああ」

「どんな、です」

「幼い頃の夢だ」

雅哉は微笑を浮かべる。

「父上や母上と共に暮らしていた頃の……な」

「おしあわせな思い出が沢山おありなのでしょうね」

雅哉はどこかあどけない表情で微笑んだ。

「ああ」

「それが、今回のことと関係ありますの?」

「……さあな」

雅哉は緩く左右に首を振った。

「私には分からん。その道の者でなければな」

「その道の者、とは」

「決まっている」

雅哉は妻を見つめた。

「陰陽師だ」

「陰陽師」

「……そう」

雅哉はもう一度、羽櫻を見た。

「御門家当主になら……分かるやも知れぬな」

「あの人妖の世話になるのですか」

毗をきつとあげる妻の腕を、雅哉は軽く叩く。

「そうまで言わずとも良いではないか」

「今回のことも、あの男が何か術を掛けているのやもしれませぬのに」

「……あれはさほど馬鹿な男ではない」

雅哉は苦笑を浮かべた。

「私は彼を昔から知っている……あれはなかなかどうして、大した男だよ」

「でも」

「もう良い」

妻を遮った雅哉は下男を一人呼び、何事かを言いつけた。

羽櫻は一声鳴いて屋根を飛び立つ。もうすぐ雅哉からの使者が来ると、主人に知らせるために。

三

背後から気配が近付いて来ていたが、蘇芳は振り向く気にもなれなかった。

「お疲れですか、蘇芳どの」

「……………」

声を掛けられて仕方なく振り向くと、そこにはやはり藤原伴雅が

居た。ここ数日、彼は毎日蘇芳の屋敷に現れる。優雅な物腰は兄の雅哉と同じく貴公子然としているが、穏やかに微笑む眼の表面はぎらぎらと油膜が張ったように光っていた。蘇芳の背にぞくりと冷たいものが這う。

「呪いは効果を表しているようですね」

手に持った扇をぱちり、ぱちりとさせながら、伴雅は言った。

「兄は一昨日から伏せているようですよ」

「左様ですか」

「流石は蘇芳どの……兄の髪の一房を渡しただけで、このような」
「陰陽師ですからな」

蘇芳は目を伏せた。紫苑がこの呪いに気付くのも時間の問題だ。そうすれば、彼はきつとこの呪いを解こうとするに違いない。それこそが彼の仕事、彼の役目なのだから。

私は紫苑には勝てない。蘇芳は苦々しくもそれを認めていた。陰陽術の力量は、ほぼ生まれつきの才能によって左右される。蘇芳は紫苑と術の応酬をやり合うつもりはなかった。いくら伴雅に御門家の不祥事を握っていると脅されようと、自らを危険にさらす気はない。

しかし、水龍がまだ生きているとは……。水龍族と戦ったとき蘇芳は未だ御門家当主であり、紫苑は幼子であった。蘇芳が経験したあやかしの戦いの中で、水龍は最も苦戦した相手である。奇策を使ってかるうじて勝つことができたが、もし本当に生き残りがいたとしたら 考えるだけでぞつとする。

とにかく 今回のことが露見しても、御門家には累が及ばぬよう手は打った。

伴雅は微笑を浮かべたまま蘇芳を見つめている。この男を狂わせたものは何なのだろう。蘇芳はふと思った。妾の子として冷遇された恨み？ 出来のよい兄への妬み？ それとも……。

蘇芳は伴雅に一礼した。

「失礼。所用がありますので出かけ申す」

「おや、そうですか」

「私が居らぬ間の祭壇の管理は、これに任せておりますので」

背後を目線で指し示す。そこには二十歳前くらいの若者が居た。

「若いが有能な陰陽師で、私の弟子です」

「お初にお眼に掛かります」

男は深々と頭を下げた。

「浅葱と申します」

「あさぎ」

伴雅は穏やかに笑って手を差し伸べた。

「……よろしく」

四

雅哉の使者が帰った後、紫苑は文机に肘を突いてため息をついた。

「明日お伺いします」

とのみ告げておいたものの、症状を聞けばそれは明らかに呪いによるものだ。

「蘇芳は何を考えている」

自分と敵対するつもりだろうか。そんな訳がない。蘇芳は確かに自分を疎んじているが、彼の力が紫苑のそれに遠く及ばないこともよく知っているのである。

「……分からぬな。弱みでも握られたか」

つぶやいたとき、羽櫻がゆらりとその姿を現した。

「何事だ？」

「お越しにございます」

からから、と牛車の音が聞こえてくる。紫苑が眉を顰めるのと同じ時に、羽櫻が言葉を継いだ。

「御門蘇芳様」

馨に先導され、蘇芳が座敷に姿を見せた。もう随分会っていない義理の父親が目の前に現れたところで、紫苑の心は全く動かない。義父に愛されないことを悩んだ時期など、記憶にもないほど遠い昔のことだ。

「父上」

それでも、面と向かつては一応こう呼ぶ。

「お久しぶりにございます。お見受け致すところお変わりなきよう
で」

淡々と挨拶をする紫苑に、蘇芳は苦い顔をして言葉を挟んだ。

「用件を言おう」

「……はい」

「お前も気付いているのだろう」

「……………」

紫苑は緩く首を縦に振った。蘇芳はしばらく口をつぐみ、やがて唐突に問い掛けた。

「水龍の子供を　飼っているのか」

「……は？」

紫苑の顔色が目に見えて変わる。蘇芳は苦々しげに顔を歪めた。

「お前は自分の立場が分かっていないようだな」

「……存じておりますが」

「分かっておらぬ！」

蘇芳は語気を荒げた。紫苑が一瞬怯んだところに、言葉を重ねる。

「お前を眼の敵にして、色々と見張らせている公達もおるのだぞ！

そういった者たちにとって、お前があやかしを匿っているなど

それもかつて朝敵とされた水龍を……！」

「では」

紫苑の声のその鋭さに、蘇芳は思わず言葉を切った。彼の紫電の瞳が焰を宿している。幼い頃から変わらぬ……。不意に蘇芳はそんなことを思った。真っ直ぐな、信念を宿す視線は強く、見る

者の心の疚しさを暴く。

「私が殺されなかったのは何故です」

「何？」

「私も鳳凰族の血を引く　謀反人の血を引く者でしょう。何故殺されなかったのです」

「それはお前の父親が」

言いかけてはつと息を呑む。蘇芳の顔が音を立てんばかりの勢いで青ざめた。

紫苑はそれ以上そのことについて追究するつもりはないらしく、すぐに話を元に戻した。

「私の拾ったのは幼子でした……しかも完全に記憶を失っておりま
す。私の元で養育すれば、ひとに仇なす存在とはなりませぬ」

「……何故言い切れる。いや、むしろそれを皆が信用すると思うの
か」

「このことをご存知なのは父上と他にもうひとりだけ……」

紫苑はすつと眼を細めた。

「問題にはならぬでしょう」

「し、しかし」

「そのことで父上は脅されている、と。意に染まぬ呪いを掛けてい
るのもそのせいですか」

「……………」

紫苑の洞察力に辟易しながら、蘇芳は頷いた。

「……では、呪いの掛け方が妙に稚拙なのは」

「気付いていたか」

「今日、使いの者から雅哉どのの症状を聞きましたから」

紫苑はやれやれといったように肩をすくめた。

「とりあえず伴雅どのを納得させるために、というわけですか」

「それだけではない」

蘇芳は声を低めた。

「あの男は危険だ。それに……お前に対する敵愾心は並々ならぬも

のがある」

「どうなさるおつもりです？」

ごくり、と蘇芳は唾を飲んだ。

「私の弟子に浅葱、という者が居る。身寄りのない孤児で」

「私と同じですね」

「同じではない。彼にはお前のような才能はない」

蘇芳はそう言い切り、紫苑の顔を伺うようにして見遣った。

「私は……呪いを掛けるとき、彼の名を使った」

「なんですって？」

呪いなどの術の契約は、名を介して行われる。通常、陰陽師たちは自分の持つ隠し名を用いるのだが、今回まだたいして力のない見習いの名を使ったということは……。

「御門家前当主と現当主が争うなどという事態にはしたくない」

「……つまり」

「ああ、そういうことだ」

紫苑はぎりりと歯を鳴らした。このままでは浅葱は死ぬ。恐らく契約者である伴雅も。

「お前が私の掛けた術を解けば……」

つまり、

「私に……殺せと？」

唸るような紫苑のつぶやきに、蘇芳が言葉を返すことはなかった。

第三章

—

翌朝、桔梗が起きると既に紫苑は出掛けた後だった。早朝に雅哉からの使いの牛車が来て、馨と共に雅哉の屋敷に向かったとのこと

だ。

「起こしてくれば良かったのに……」

ぼそぼそと文句を言いながら顔を洗い、菊の揃えてくれた食膳の前に座る。ちょうど箸をつけ始めたとき、背後から声を掛けられた。
「おはようございます」

振り向くと、昨日見た羽櫻という名の式神が自分を見て穏やかに微笑んでいる。

「あ、おはよう……ございます」

羽櫻はす、と膝を落として畏まった。

「紫苑さまに言い付かりました。貴方をお守りするように、と」

「私を？ どうして？」

「それは」

お食事をお続けくださいと言った後、羽櫻は簡単に説明した。

「貴方の存在は藤原伴雅に知られている。そして」

「そして？」

羽櫻は少し視線を落として言う。

「ふつつ、ひととあやかしが同じ場所で生きることではない。

貴方の存在を知れば、ひとは必ず貴方を排除しようとするでしょう」

「……………」

排除されているのは、紫苑も同じかもしれない……。桔梗はぱたんと箸を置いた。

「……ねえ、羽櫻さん」

ぽつり、と言葉を唇に載せる。

「はい」

「紫苑は、ひとなの？」

「……………」

「それとも、あやかし？」

「……………」

羽櫻は答えない。桔梗の斜め前に座る菊は困った表情でふたりを眺めた。

「もしかして」

桔梗はつぶやく。

「今度のこと……私のせい……？」

「そういうわけでは」

羽櫻が口調を強めたとき、

たっ！

彼の背後の壁に矢が突き立った。菊がはっと立ち上がる。

「曲者?!」

「ちっ」

羽櫻もすぐさま飛び起き、どこからともなく長剣を取り出した。

刃は黒く、鋭く輝いている。

「桔梗さま!」

「な、何？」

桔梗は事態が飲み込めていないのか、目を大きく見開いて体を強張らせていた。

「失礼」

羽櫻は片手を伸ばし、桔梗を抱えあげた。主である紫苑に桔梗を守れと言われたのだ。それが何にもまして大切な、優先すべきこと。荒々しく帳が切り裂かれ、覆面をした数人の武装した男たちが雪崩れ込んできた。

「あれだ!」

そのうち一人が桔梗を指差す。

「あやかしだ! あやかしを殺せ!」

「あ……!」

あからさまな殺意にさらされ、桔梗の体が震えた。

ぎん! 羽櫻は黒い刃で一人の刀を受け止め、打ち払う。そのまま返す刀で峰打ちにした。鈍い音は、おそらく彼の骨の折れた音だろう。言葉もなく男は横転する。

「きゃあ!」

悲鳴に桔梗が振り向くと、別の男の刀によって菊が袈裟切りにさ

れていた。血の一滴も零すことなく、菊の姿は虚空に消える。その
あとには、菊の花が。

「菊さん!!」

桔梗は叫んだ。

「桔梗さま!」

羽櫻の腕から抜け出し、舞い落ちた菊の花を手取る。ほんのりと甘い香りを漂わせる花。それは茎の部分を真っ直ぐに断ち切られており、やがてみるみるうちに 枯れ落ちた。

「菊さん……」

桔梗の頭上に、男が刀を振り上げる。

「桔梗さま ！！」

羽櫻の声が、遠くで聞こえた。

二

紫苑の勧めた薬湯を飲み、雅哉はふう、と息をついた。

「朝早くからすみませぬな」

「いいえ」

昨晩急に症状が悪化したという。現在は落ち着いているが、頭が割れそうなほどに痛いという。 早急に何とかしなければ。 紫苑は眉を顰める。

「紫苑どの」

「はい?」

雅哉の声に、紫苑は顔を上げた。真っ直ぐな眼差しが、彼の紫電の瞳を見つめる。このように彼の眼を見つめるものなど、普通はない。忌むべき色 ひとではないという印の色なのだから。 雅哉は、紫苑が思っていたよりも器の大きな人物なのかもしれない。

「これはやはり、呪いによるものですか」

「おそらくは」

紫苑は慎重に言葉を選ぶ。

「ふむ」

雅哉はやつれた顔に緊張の面持ちを浮かべた。

「私は、死ぬのですか？」

「いえ」

紫苑は首を横に振る。

「そのようなことはありません。術そのものは非常に拙いものに」

懷から取り出した細長い紙に、雅哉から借り受けた墨と筆で文言をさらさらと書き付けた。そのようにして作った呪符四枚を、掌底に乘せて軽く息を吹きつける。それらは軽く宙に舞い、東西南北の柱に貼り付いた。

「……失礼」

右手で印を結び、左手を雅哉の額にあてた。紫苑の薄い唇がかすかに動いた。雅哉の頬に血色が戻っていく。やがて紫苑の聲が最後の一言を発して消えいく頃には、あれほどまでにひどかった頭痛も治まっていた。

「おお」

表情を明るくする雅哉に、紫苑は首を横に振った。

「お喜びになるにはまだ早過ぎます」

「何故」

「これを」

紫苑は右手を開いてみせる。そこには黒い炎がちろちろと瞬いていた。

「そ、それは？」

「呪い手の……念です。そうとう強い」

紫苑はきゅつと手を握り、その炎を四散させる。その様子を雅哉は呆然と眺めた。

「……つまり」

紫苑はゆつくりと噛んで含めるように言う。

「その拙い術者に呪いを頼んだ者　その者の持つ貴方への負の感情。それが取り除かれぬ限り、貴方は呪いから完全に逃れることはできないというわけです。そもそも」

紫苑は四枚の札を順繰りに眺めて、

「このままでは貴方はこの部屋を出られません」

「……誰なのだ」

雅哉は呟いた。

「私をそこまで憎む者とは……」

「心当たりはございませんか」

「ない」

「そうですか……」

「調べていただけませんか」

雅哉の言葉に、紫苑は彼の顔をじつと見つめた。

「調べることは、可能です」

実際、彼は既にその男の名を知っている。

「しかしその者の名を貴方が知るということは、貴方とその者との間に念の繋がりができるということ」

「念の繋がりが？」

「貴方がその相手に抱く怒りや憎しみ……そういったものが相手に流れていくのです。今はその者から貴方へ流れるだけの一方通行ですが、それが双方向に流れるようになります」

紫苑はため息をついた。

「その、ひとの念の媒介となったり、もしくは障壁となったりするのが術を掛ける陰陽師なのですが……」

彼我にこれほどまでの力量の違いがあるとするならば……。

「術者も、貴方に呪いを掛けた者も。おそらく無事にはすみません
い」

「……」

雅哉は黙って自らの指先を見つめている。

「いかなさいますか。それでも、お知りになりますか」

「……………」

「雅哉どの」

雅哉は顔を上げた。紫苑に向かい、力強く頷く。

「私は、知りたい」

三

閃光が、辺りを焼いた。

「くっ?!」

羽櫻までもが一瞬眼を閉じてしまう。刀を構えていた三人の男は皆床に倒れ伏し、眼を庇いながら起き上がるうともがいている。

「ぎゃああああ!」

凄まじい悲鳴に羽櫻が驚いて眼を開けると　そこに水の龍がいた。体に合わない単から伸びる白い手足、風もないのに逆巻く銀髪。爛々と輝く青い瞳は研ぎ澄まされた刃物のような鋭さを宿す。翳した右手の先から迸る水の縄が、先ほど桔梗に切りかかった男の喉首をぎりぎりと絞め上げていた。

「愚か者が」

「桔梗」がにっと笑った。紅も差さないのに赤く色づいた唇は、艶かしくも酷薄な笑みに歪んでいる。

「そんなもので、私を傷付けられるとでも?」

「彼女」の視線が一瞬彼の刀に吸い寄せられ、やがて再び男の顔に向かった。

「『御子』たる私に刃を向けた罪　死を以って贖うがいい」

「あ」

声にならない絶叫。男の首は水によって切断され、床に転がり落ちた。血管が急速に収縮したためか、傷口から血は零れない。

「……………」

「桔梗」は微笑み、辺りで硬直している三人の男のうちのひとり

に視線を固定した。

「お前たち、どこから来た？ 誰に頼まれた？」

「……い、言えぬ！！」

「………」

「桔梗」は面白くなさそうな顔で彼の全身をちらりと眺め、
「そうか」

どん、という衝撃と共に、彼の胸には大きな穴が開いた。羽
櫻は息を飲む。

「お前は？ 言えるか？」

「ひっ」

死体になど興味はないというように、「桔梗」は次の男へと視線
を投げた。男は体中を走る震えを隠そうともせず、

「ふ、藤原伴雅さまだ」

「……そうか」

「桔梗」は満足げに頷き、やがて視線を羽櫻に映した。今まで感
じたことも無いほど強い妖気 羽櫻は激しい緊張で汗が滴るのを
感じる。

「このふたり、お前に任せよう。殺すなり生かすなり好きにしろ」

「………」

ふたり、というのは殺さずに置いた侵入者のことらしい。

「これから少し、行くところがある」

「い、いずこへ？」

情けないほどに上ずった声で羽櫻が尋ねると、「桔梗」はゆるく
微笑んであっさりと答えた。

「藤原伴雅の屋敷へ」

そしてあっという間に庭へ飛び出し 姿を消した。

「………」

羽櫻はひとまず生きている男たちを縛り上げ、次いで鴉の姿に戻
り空に羽ばたいた。急いで紫苑に事態を知らせねばならない。放っ
ておいたらあのあやかしは何をするか 。あの冷やかかな威厳を

持つ美しい瞳で見つめられたときの恐怖と陶酔が、未だ羽櫻の体を震わせていた。

第四章

—

あれはいつだっただろう……。自分は五歳くらいだったような気がするが、はつきりとは分らない。しかし記憶にあるのは 優しかった手。

今から思えば、多分あれはどこかの屋敷の庭だったはずだ。石に躓き転んで、泥だらけになった。着付けてもらった一張羅の袴も汚してしまい、母に怒られてしまうことを思うと身が竦んだ。そのとき、差し伸べられた手があった。

「大丈夫か？」

「……………」

うつむいて泥にまみれた膝を見つめていると、手の持ち主は苦笑したようだった。でも、あの手はそんなに大きくはなかった……。

「こちらへおいで」

「え？」

「いいから、早く」

屋敷の濡れ縁に上がりさらに奥へと導かれた。

どれだけ歩いただろうか、奥まった一室に通された彼は、そこで自分の履いていたものと寸分違わぬ袴を目にした。

「え……………」

「これはね、……………」

隣りで何か言っていたような気がしたが、良く覚えていない。た

だ、これに履き替えることが出来れば母に叱られなくてすむ。そのことだけが頭にあった。

結局その袴をもらい受け、何もなかったような顔で彼は母の元に帰った。礼さえも言わなかったような気がする。そのことだけは悔やまれるが、思い出すたびに何となく胸の奥が少し温まるような……、そんな思い出なのだった。

「……ふう」

宮中からの帰り道、牛車の中で伴雅はため息をついた。

「妙なことを思い出したものだ……」

軽く頭を振って幼い日の幻影を振り払い、ひとりごちる。

「上手くやっただろうか」

参内する前、御門紫苑の屋敷に居るあやかしの殺害を命じた。この判断そのものは一般常識に照らしてそれほど逸脱してはいない。あやかしはひとの世界における異分子。それも飛び切り危険な。排除することに何も躊躇うことはない。それも、あのあやかしはかつて朝敵とされ討伐された水龍族であるというではないか。

「……言い訳か」

伴雅は苦笑した。実際のところは兄が一目置いている紫苑が気に食わないという、それだけの理由のような気がする。

「まあ、どうだっていい……」

もうすぐ兄は居なくなるのだから。そうしたら　そうしたら？牛車ごとん、と音を立てて止まった。屋敷に着いたのだろうとは感じたが、それにしても牛飼いの童が何も言わないし、下男たちがやってくる気配もない。

「どうした？」

御簾をあげた伴雅は小さく息を飲んだ。牛飼いの童は牛の横で腰を抜かしへたり込んでいる。伴雅はきゅっと唇を噛んで牛車から降りた。

「何者だ」

鋭く誰何の声を上げる。

屋敷の門の上にふわりと腰掛け、じつと彼を見つめる一匹の美しい妖獣。長い銀髪が風に流れ、青い瞳が笑うように瞬いている。

「お前が藤原伴雅か？」

薄い唇が花のように綻びる。伴雅が気圧されたように黙っていると、あやかしは門をたん、と蹴って伴雅の目の前に降りてきた。

「どうした？ 私が自ら来てやったのだぞ」

「……何だと？」

あやかしの手が伴雅の肩にかかり、その端正な顔が間近に近付いた。吐息が触れそうなほどの距離で囁く。

「私を殺したいのだろう？」

「……………！」

伴雅は顔を強張らせて一步退いた。あやかしは美しい顔を残酷に歪めて笑う。

「お前が帰ってくる前にこの家中の人間を殺してやつても良かったのだが、お前を待ってやつていたのだ。感謝して欲しいものだ」

「……私を、殺すつもりか」

伴雅は青ざめた顔でそう言った。あやかしは大して興味もないような顔で彼を眺める。

「私がひと殺しをするのを、紫苑は好まない。だが……」

青い眼光を煌かせる。

「水龍の『御子』を殺そうとした奴には、それ相応の報いが必要だ。そう思わないか？」

「……お、お前は一体」

「我が名は『桔梗』」

あやかしはゆっくりと、滑るような足取りで伴雅に近付く。

「水の四天王、水龍族最後の『御子』だ」

紫苑がそろそろ雅哉の屋敷を辞そうかと考えていた頃、帳の隙間から黒い羽根が舞い落ちてきた。

「これは……？」

床に横になった雅哉の問いに答える前に、紫苑はその羽根を手に取り軽く額に翳す。彼には羽櫻が届けたものであることがすぐにはわかったのだ。

「……………！」

紫苑の顔色が音を立てんばかりの勢いで変わる。

「紫苑どの？」

「申し訳ありませんが、これにて失礼致します」

「何があったのです？ 今回のことに関係があることですか」

「あるともいえません……ないとも」

「どういうことなのです？！ はつきり言って頂きたい」

「……………」

紫苑は雅哉に袖をつかまれ、返答に窮した。 急いで行かねば

あの「桔梗」は何をするかわからぬ。紫苑は覚悟を決めて口を開いた。

「貴方に呪いを掛けたのは、……藤原伴雅どのです」

「……………！！」

雅哉の顔が驚愕に染まった。

「そして、彼は貴方が私に術の解除を依頼するであろうことを知っていた」

「……………」

「だから、私の屋敷を襲撃させたのです。そして私の屋敷には……あやかしの少女がおります」

「なんですって？」

雅哉は未だ青ざめた顔のまま、それでもあやかしという言葉には反応して顔を上げた。

「記憶を喪った、幼い子供です」

「しかし」

「そう。子供とはいえあやかしはあやかし。危機に陥れば妖力を使うとも考えられます」

「つまり、伴雅が危ないと……」

「今、そのように連絡が参りました」

「急いで行かねば！」

雅哉は紫苑の袖を離した。床から起き直り、ひとを呼んで身支度を命じる。紫苑は驚いて彼を制しようとした。

「雅哉殿、まさか」

「何がまさかです」

ぎり、と雅哉は紫苑を睨みつける。

「私の弟を傷つけたら……、承知しません」

「……………」

紫苑は思わず口をつぐんだ。雅哉の一族想いは有名であったが、これほどまでとは……。家族というものを知らぬ紫苑にとっては、少し眩しくさえある。

「一足お先に彼の屋敷に向かい、その者を止めて下さい。私もすぐ参ります」

「……………分かりました」

紫苑は懷から護符を取り出し、術をかけてそれを丸薬に変えた。

「これをお飲みください。しばらくは呪いが薄れるはずです」

「かたじけない」

雅哉はよろめきながらも丸薬を口に含み、飲み下した。紫苑はそれを確認した後、早足に屋敷を出て行く。

桔梗……！ 噛み締めた奥歯が鈍い音を響かせた。

三

突然、蘇芳の屋敷に置かれていた呪いの祭壇がふたつに割れた。

「蘇芳様」

祭壇の管理を任せていた、そして実質的には術の抛り代であった浅葱が、息も絶え絶えに蘇芳の元にやってくる。

「術が……返されたか」

蘇芳は静かに呟いた。

「しかし……これは」

割れて床に落ちた鏡を手に取り、つぶやく。

「紫苑が返したわけではないな」

どちらかというと、術を返されたというよりも術が断ち切られたような、そんな印象である。実際全ての術が返されたのであれば浅葱は無事ではすまないはずだ。蘇芳の隣りで畏まっている浅葱は荒い息をついているが、生命に別状のある様子には見えない。

「……ということは」

藤原伴雅の屋敷で、何かがあったということだろうか。彼の屋敷にもこれと似た、しかしもっと小さな祭壇が設けられており、そこで伴雅は毎夜のように呪いの念を鏡に込めているはずである。

「それが、割られたのか……」

「いかが致しましょう」

浅葱に問われ、蘇芳は答えた。

「お前は休むが良い。……もう、この件からは手を引いたほうが良さそうだ」

「はっ」

さがっていく浅葱の背に向けて、蘇芳は声を掛ける。

「浅葱」

「はい」

振り向いた彼の顔には、疲労の色が濃い。

今一体何が起きているのか、蘇芳にも把握できていない。だが、ひとつだけ分かっていることがあった。このまま術が返されず、自然に消滅すれば浅葱は無事にすむだろう。しかし、結果的に術が跳ね返ってくることになれば……浅葱は死ぬかもしれない。

「いかなさいました、蘇芳さま」

蘇芳の身代わりとなつて死の危険にまでさらされているというのに、浅葱の瞳は真つ直ぐに彼を見て疑うことを知らない。

「お顔の色が優れませんが」

「……いや、大事な」

そして蘇芳はぼつりとつぶやいた。

「すまない」

それは浅葱に向けて言つた言葉なのか、それとも紫苑に向けて言いたい言葉なのか……蘇芳にも良く分からなかった。

四

「桔梗」の放つた水の刃に、呆気ないまでに鏡が両断される。彼女は屋敷に入るやいなやまっすぐにこの部屋まで来て、伴雅が止める暇もなく祭壇を破壊したのだ。

「何を……！」

声を震わせる伴雅に、「桔梗」は嫣然と微笑む。

「これが呪いの元なのだろう？ 紫苑が随分悩んでいた」

「……………」

鏡の切断面からは黒い霧のような物がもやもやと出てきていている。思わず伴雅がそれをじつと見つめていると、

「これは」

「桔梗」は一抱えほどの水の球の中へとそれを吸い取った。

「お前の呪いの念だ」

「……………」

美しい水の中でどろどろとしたその黒いものが次第に形を変えていく。「桔梗」は表情に微笑を含みながらその様子を見守った。やがて、それは小さな一匹の海蛇の形になる。そして、赤い一對の眼がぎろりと伴雅を睨んだ。

「ひっ」

伴雅が小さく息を呑んだ。

「想いは持ち主の元へ」

「桔梗」は水の球を軽く掲げる。

「返さねばならぬな」

海蛇が水面から飛び出し、伴雅の胸元に飛び込んだ。

「あああああああああああ……！」

広い屋敷内に響き渡った絶叫。それを、紫苑は伴雅邸の門の前で聞いた。

第五章

—

騒然としている屋敷の中を駆け抜けながら、紫苑は見覚えのある従者の顔を見つけて声を掛けた。

「女子供を連れて屋敷から出ている。危険だ」

「しかし伴雅さまが……！！」

「彼のことは私が何とかする」

「……………」

一瞬の逡巡の後彼は頷いたが、その時には紫苑は再び駆け出していた。

「桔梗！」

先ほど聞こえた絶叫は恐らく伴雅のもの。ならば恐らくそこに「桔梗」は居る。

「ききよ……………」

奥まった部屋の前、紫苑は足を止める。「彼女」が居た。足元には苦悶する伴雅の姿。皮膚の色がどす黒く変色している。

「伴雅どの！」

駆け寄ろうとした紫苑の目の前に、「桔梗」がふわりと降り立った。

「桔梗……！」

「殺しはしていない」

美しい眼差しの中に一際凄絶な光を宿し、「彼女」は紫苑の乱れた髪に触れる。

「ただ、返しただけ」

「何を……だ」

視線を「桔梗」の瞳に吸い寄せられたまま、紫苑は祭壇が破壊されていることに気がついた。

「術を返したのか？」

蘇芳が名を使った浅葱という男を思い出す。彼の生死を思って顔を強張らせた紫苑に、「桔梗」は首を横に振った。

「返してはいない。術者が死んだら、紫苑は嫌がるだろう？」

「……………」

「この男と術者の間にあった念の流れを断ち切っただけだ。そして」

「桔梗」は伴雅に冷ややかな目を向けた。

「呪いの念をこの男に返した」

「……………」

伴雅は蹲って脂汗を流し、苦しげに息をついている。言葉を出せるだけの余裕はないようだ。「桔梗」は伴雅の目の前に軽く膝をつき、屈み込んだ。

「苦しいか？」

長い銀髪がさらさらと零れる。伴雅はかろうじて顔を上げた。

「お前が今苦しんでいるのは、お前自身の呪いの念によつてだ」

「わ……私……自身の？」

「そう」

「桔梗」は頷く。立ち上がり、紫苑をちらりと見遣った。微笑んでいる。

「……この男が本当に呪っていたのは誰なんだろうな？」
その答えを、既に紫苑は知っているような気がしていた。

二

牛車に乗り込み伴雅の屋敷へと向かっていた雅哉は、長らく体を覆っていた痛みと重さが同時に消え失せたのを感じていた。だが、その顔は晴れない。

「……何故」

そう問われて、心当たりが全くないとは 残念ながら言えない。妾腹として常に日陰の身であることを余儀なくされた伴雅とは違い、彼の母親は藤原時雅の正室であった。しかも皇族である 生まれながらにして境遇が違った。しかも、伴雅の母の両親は早くに亡くなったと聞いている。婚姻生活において、経済的な負担は全て女の家が背負うもので、その親を亡くした女がどうなってしまうか 想像には難くない。

「しかし……」

雅哉は何かと伴雅の面倒を見てきたつもりだ。母親が違うとはいえ、彼にとつては兄弟に違いないのだから。伴雅も雅哉を慕っていたはずだ。少なくとも彼はそう思っていた。それなのに何故……。いつだって思い出せる。泥にまみれて泣きそうになっていた幼い弟の顔を。初めて時雅の屋敷にやってきた伴雅 幼名は確か「ともや」とか言った は雨上がりのぬかるみに足をとられて転び、一張羅だっただろう袴をどろどろにってしまったのだ。

彼はあらかじめその少年が弟だと知っていたせいもあって、あまりに可哀想で見えていられず、父にせがんで新しい袴を用意させた……。いや、実のところ父親としてそれを見て平静ではいられなかったのだ なぜなら、伴雅と時雅の顔はとても良く似ているのだから 時雅と雅哉。時雅と伴雅。それぞれが良く似ている。そして、雅

哉と伴雅も……。

「急げ」

雅哉は童を叱咤した。鞭が唸る。牛車は一際激しく揺れながら速度を速めた。

三

「うん？」

立ち尽くしていた紫苑が、眉を顰めた。うずくまったままの伴雅に、微妙な変化が起こっている。噛み締められた齒の間から、ちろちろと青白い炎が立ち上っているのだ。

「そういうことか」

「桔梗」はにやりと笑った。

「おかしいとは思ったのだ。たかが人間の呪いの念……いくら強いとはいえ、そう簡単に蛟の姿など取れるはずがない。こいつの身には、何かが巣食っている」

「……………」

どこか腑に落ちぬものを感じながら、紫苑は口中で真言を呟き、袖から呪符を取り出した。一閃、紫苑の投げた符は伴雅の周辺で前触れもなく破れる。目に見えぬ雷光に切り裂かれたようにも見えた。「何……?!」

紫苑は警戒を強めた。伴雅の体内では未だ嵐が荒れ狂っている。

「ぐぐぐ……………」

肩甲骨の辺りが盛り上がったかと思えば凹み、続いて腹が突き破られそうなほど膨れた。

「……………これは」

紫苑はつぶやいた。

「手が出せぬ……………」

伴雅の体内にもものけが居たとして、何故蘇芳はそれに気付

かなかったのか。紫苑は先ほど不思議に思った。いくら引退したとはいえ、蘇芳は間違いなく有能な陰陽師である。その彼が気配を感じ取れなかった、その事実が意味するところはふたつ。ひとつの可能性は、そのもののけが取るに足りぬほどの妖力しか持ち合わせていなかった場合。もうひとつは……。

「ふん」

伴雅を見下ろす「桔梗」は小さく鼻を鳴らした。

「自らの意志で己を苦しめているのなら、紫苑がいくら助けてやりたくともどうしようもないな」

「私の……意志で？」

伴雅が喘ぎ喘ぎ言う。

「桔梗」はその表情から笑みを消した。なまじ造形が美しく整っているだけに、その双眸は鋭利な厳しさを漂わせる。

「お前の体内にはもののけが棲んでいる」

「……もののけ」

「お前の負の感情に吸い寄せられてやってきたのであろうが……」
「ふ、の？」

「伴雅どのが」

紫苑が口を挟んだ。

「誰かを憎む気持ちです」

「だれ、かを……兄を？」

だから、呪いを掛けた。

「そうか？」

「桔梗」は問う。

「私は先ほどお前に呪いの念を返したと言ったな」
「……あ、あ」

「ならば何故……お前の兄に向かって飛び出して行かぬ？　いつまでもお前の胸のうちに留まってお前を苦しめる？」

「……………」

「誰かを呪うものは」

紫苑はゆつくりと言った。

「自分をも呪うものです。それが誰かを呪うことに対する無意識のうちの自責の念から来るのか、それは私にも分かりませぬ。しかし」
「……………」

いつしか伴雅の体の変形は収まっていた。

「貴方の場合は　そういうことではない」

「わたし……………」

「お前は何故そうまでして自分を苦しめる？」

「桔梗」の声に穏やかさが生まれた。紫苑ははっと彼女の横顔を見つめる。相変わらずその表情は厳しいが、瞳は和らいでいた。水龍族を束ねるべく生まれた「御子」　青龍の魂を宿す特別な存在その器の大きさを感じさせる。不用意にその存在に触れれば指を切り落としてしまいそうな鋭利な殺意と同居して、何ともいえない威厳を醸し出していた。

「わたしは」

伴雅の眼から涙がこぼれた。ぎらついていた瞳が、清らかな液体に覆われている。

「私は生まれてきてはならなかったのだ」

「……………何故」

「私が生まれたせいで、母は不幸になった」

「……………」

紫苑は胸にちりりとした痛みを感じた。彼自身にも覚えのある、痛み。それは昔、宮中で聞いた噂。鳳凰族と伝えられる彼の母は、彼を産んだ後精神に異常をきたし、そのまま行方を眩ませたという。一族を絶滅へと追いやった憎い人間の子供を産むということ、そのことはどれほど母を苦しめただろうか。そう思うと、紫苑はいたたまれなくなる。

「桔梗」はそんな紫苑の横顔を見遣っていたが、やがて伴雅に向き直った。

「お前の母は、お前を憎んだのか」

「……いや」

「お前に恨み言を言ったことがあったのか」

「……ない」

伴雅は身を振り絞るようにして言った。

「私を愛してくれた。愛してくれたが、……いつだって泣いていた」
ぱつと顔を上げる。その顔色は真っ赤になっていた。

「私が居なければ、別の伴侶も見つかっただろう。あんな風に寂しく、荒れた家で死んでいくことなどなかったのだ」

「では」

「桔梗」は言った。

「お前がもののけに体を食い破られることを、お前の母は望んでいるのか」

「…………」

「里子に出すこともせず、己が手ずから育てたお前が、そんな風に苦しむことをお前の母は望むのか」

「…………」

紫苑は一步伴雅に近づいた。ぴくり、と伴雅の体が震える。

「貴方が自らもののけを体から追い出したいと願って下さらなければ」

紫苑は再び呪符を手にとった。

「貴方の苦しみを取り除いて差し上げることができません」

「…………」

「伴雅どの、どうか」

そのとき、廊下を駆ける足音がした。

「伴雅……」

飛び込んで来たのは 藤原雅哉。紫苑の体に緊張が走った。

「……兄上」

伴雅の眼の色が、変わる。

第六章

—

「危ない！」

咄嗟に紫苑は雅哉の前に飛び出した。伴雅の右手の爪が伸び、紫苑の衣を切り裂く。

「紫苑！」

「桔梗」が声を上げ、伴雅を蹴り飛ばした。

「この下衆が……！」

傷口を押さえた紫苑の手が赤く染まるのを見て、「桔梗」の眼差しが冷たい怒りに燃える。

「伴雅」

床に転がった彼に向かい、雅哉が名を呼んだ。

「ぐぐ………」

伴雅の歯がかちかちと打ち鳴らされ、その隙間から細長い舌がちらちらと見えた。時折ひゅう、という音と共に鬼火が唇を焦がしている。その姿は生成り　もののけとひととの狭間に、伴雅はいるのであった。

「紫苑殿どの」

雅哉がぼつりと口を開いた。

「伴雅と話がしたい」

「しかし、雅哉どの」

「良いのだ」

す、と紫苑の手を退けて雅哉は顔を上げた。

「これ以上貴方の手を煩わせるのは忍びない」

「何をおっしゃいます！」

「良いのだ」

雅哉は今一度繰り返した。

「あれは私の弟なのだから」

「……………」

「あれにとって、私は唯一の兄なのだから」

「……………」

雅哉はゆつくりと視線をめぐらし、「桔梗」を見つめた。

「水龍……か」

ぼつり、とその言葉を唇に載せる。陰陽の知識に通じていない雅哉でさえ、その存在については良く知っている。強大な妖力を持つ四天王の一。滅びたはずの一族。

紫苑は言葉を失くし、ただ雅哉を見つめていた。このことを宮廷に報告されれば、おそらく自分は反逆者として処罰されるであろう。下手をすれば命はない。それはおそらく彼女とて同じこと……いや、彼女はきっと大人しく殺されまい。

「……………」

雅哉はそのまま何も言わず、「桔梗」から目をそらした。一歩ずつ、伴雅の方へと踏み出す。

「兄……上」

伴雅は搾り出すように呻いた。

「来てはなりません……」

「伴雅」

「どうか……」

「伴雅」

「兄上……!」

伴雅の爪が再び伸び、空に白刃の煌きにも似た軌跡を描いた。

「あ……!」

血飛沫が飛ぶ。だがそれは雅哉のものではなかった。伴雅の右手に深々と突き立っていたのは、彼自身の左手の爪だったのである。

「伴雅!」

雅哉は駆け寄り、伴雅の頭をぎゅっと抱いた。

「何をするのだ……手を、手を離しなさい」

「いけません、兄上」

伴雅は呟いた。

「この右手を離せば、きっと兄上を切り刻んでしまいます」

「……それで」

雅哉の眼から涙が零れた。

「それでお前の気は済むのか」

「え……」

「私がいなくなれば、お前はしあわせになれるのか」

「……………」

「お前がそれを望むなら」

雅哉は伴雅を深く抱きしめた。

「この兄を殺すが良い」

「雅哉どの！」

紫苑が声を上げるが、「桔梗」はその腕に触れて彼をとどめた。

「桔梗……………」

「桔梗」は冷淡に笑う。

「好きにさせてやればいい」

「しかし！」

「伴雅」

焦る紫苑をよそに、雅哉は伴雅に優しく語り掛けた。

「忘れるなよ」

「何を……………」

「私はお前の兄だ」

「……………」

「お前がいくら私を憎もうと……………私がお前を憎むことはない」

「……………」

「いつまでたつても、私にはお前の幼い頃を忘れることができないのだ」

「……………」

「覚えているか。初めて私をお前が会った日を」

「……………」

「お前は新しい袴を泥だらけにしていたなあ」

「……………」

伴雅が小さくつぶやいた。

「あの時、代わりの袴を用意させたのは父上だったのだよ」

「父……………」

「そうだ」

「私のために……………」

「勿論。お前の名をつけたのも父上だ。私と、父と共通の文字……………」
『雅』を与えてな」

「……………」

「私には沢山の異母兄弟がいるが、その中ではお前が一番年近い。父上もそれは良くご存知で、だからこそ」

ともまさ。

「私とともにあるようにと……………」

「……………」

「伴雅。確かに私の父上はお前の母親を捨てた」

伴雅の体がびくりと震える。

「男と女とはそのようなものだ。所詮他人でしかない。そのことは私にも良く分かっている。酷いことだが、どうしようもない」

「……………」

「しかし」

雅哉は伴雅を揺すぶった。

「親子や兄弟は、違うのだぞ。どのようなことがあっても決して切れぬ縁なのだ。少なくとも、私はそう思っている。お前は違うのか」

「……………」

「だから」

雅哉の指が伴雅の涙を拭った。

「もう、やめぬか」

「……………」

「その手を離せぬか」

「……私は」

伴雅は幼子のように首を左右に振った。

「私は……」

「お前には私は殺せぬ」

「……」

「お前を死なせたくないのだ」

「あ……」

「なあ、伴雅……」

雅哉の頬を伝った滴が伴雅の肩に落ちる。

「……兄上」

伴雅は口元を震わせた。

「私は……私は」

紫苑がはつと顔をあげた。袖の中で印を結び、呪を唱え始める。

「私は！」

伴雅はがくん、とのけぞった。

怖かった……！

伴雅の大きく開いた口から何かが飛び出した。

二

兄上の背中はいつも私の前にあった。いつか置き去りにされてしまうのではないか、見捨てられるのではないかと……怖かった。父に捨てられた母のように。自分も、いつか……きつと。

それならば、私から兄上を切り捨てればいい。

「本当は……」

伴雅はつぶやく。

「……手を、伸ばして」

兄上に届かせたかった。兄の補佐として立派な人物になりた

かった。しかし兄は常に自分の一步前に行く。決して届かない。

「私では駄目なのだと思ったとき……憎かった」

兄が 自分が。

「そんなことはない」

雅哉は言う。

「お前の為にも、私は立派な兄でありたかったのだ」

伴雅の眼が大きく見開かれる。

「……兄上」

「こんなにも……すれ違うとはな」

雅哉の手がそつと伴雅の額を撫でた。

「……」

伴雅の唇がすつと円弧を描く。穏やかな笑み。

「……そつ……ですね……」

そのまま彼は眼を閉じた。

「伴雅……？」

雅哉の呼びかけにも答えぬ。雅哉は乱暴に肩を揺すった。

「伴雅！」

「放っておけ。意識を失っているだけだ」

掛けられた声に、雅哉はびくりと体を震わせた。振り向いた先に立っているのは銀髪の美しいあやかし。紫苑は彼女を押しつけるようにして、雅哉の前に屈んだ。何かその両手に包まれているものがある。

「それは……？」

雅哉に問われ、紫苑はそつとその手を開いた。そこには一包みの灰。

「伴雅どのの身に巢食っていたもののけにございます」

「おお」

「伴雅どのが自ら体外へと追い出して下さいましたので」

「……そうか」

雅哉は大きく息をついた。

「……紫苑どの」

雅哉は伴雅の頭を抱いたまま彼を見上げた。

「ご迷惑をお掛けしたついでに、一つお願いがあるのです」

「何でしょうか」

「……どうぞ、今回のことはお上には内密に願いたい」

「は」

「家人どもには私から申し渡しておきます。紫苑どのにご迷惑の掛かることはございません」

「わかりました」

紫苑は頷いた。今回のことが露見すれば蘇芳らの立場も危うくなり、ひいては御門家全体の問題ともなり兼ねない。ただでさえ半妖である自分を嫌う宮中の者たちは、それこそ鬼の首でもとったように御門家現当主を非難するだろう。

「それともうひとつ」

雅哉は視線を「桔梗」に向けた。

「その……あやかしのことです」

薄い水色の瞳がじつと雅哉に固定される。切れ長の伶俐な双眸の持つ威圧的な力に、雅哉はじわりと汗ばむのを感じた。

「雅哉どの……」

紫苑の声が遠く感じるほどに、圧倒される。

「私は」

「桔梗」は不意に口を開いた。

「紫苑に迷惑を掛けたくはない」

「……え？」

「不要な殺生を紫苑が厭うなら、約束しよう」

厳かとも聞こえる口調で、彼女は言った。

「ひとの世の秩序を荒らしはしない……と」

「まことか」

「私は水龍族の正当なる末裔。そして選ばれし『御子』だ。言葉を違える事はない。それに」

「桔梗」は皮肉げな笑みを浮かべた。

「あやかしは『ことば』の持つ本当の力を知っている。ひとと違い軽んじはせぬよ」

「……雅哉どの」

紫苑が口を開きかけるのを、雅哉は手で制した。

「もし……私が否といえばどうする」

じつと彼女を見据えて問う。

「簡単なことだ」

「桔梗」はいつそ穏やかとも言える笑みを浮かべた。

「私を目撃した者たちをひとり残らず殺せばいいだけのこと」

「桔梗！」

紫苑は「桔梗」の腕を掴んだ。彼女はふわりと振り向く。

「お前……！」

「何がいけない？」

「桔梗」は水色の瞳を微笑ませていた。

「私は生きようとしている、それだけのことではないか。人間たちとて生きるためには多くの動植物を犠牲にしているだろう？ それだけではない。我々あやかしの死の上に今日のひとの世の平穏があるのは事実」

「しかし」

「それに、今の場合はただこの男が秘密を守れば良いだけのこと」

「……………」

「どうだ？」

雅哉の額から脂汗が滴った。ゆっくりと彼は頷いてみせる。

「ありがとうございます」

紫苑は深々と頭を下げた。「桔梗」はその姿を見て少し寂しそうに眉を寄せ やがてその体の支配権を手放した。

自分のした小さなくしゃみで、桔梗は目を覚ました。

「あ……」

瞬くと、見慣れた天井にゆっくりと焦点が合う。

「気がつかれましたか」

横に視線を投げると、見慣れぬ式神が見えた。薄桃色の衣を纏った女房姿で、肌の色は透けてしまいそうな程白い。

「小雪と申します」

「こゆき？」

「はい」

桔梗は体を起こした。

「……新しい式神さん？」

「冬の間、桔梗さまのお世話をさせて頂きます」

「小雪さんは何の精なの？」

青い目を輝かせて尋ねる彼女に、雪は微笑みながら答えた。

「山茶花です」

「ささんが……か」

ふと思い出して尋ねる。

「あの……紫苑は」

「紫苑さまは今義父殿のお屋敷にいらっしゃいます」

「お義父さんの……」

「ええ。もうすぐお帰りになられますよ」

「そう……」

桔梗は視線を落とした。誰かに襲われたのはほんやりと覚えている。その後気を失ってしまって……羽櫻が助けてくれたに違いない。紫苑の耳にもそのことは入っただろう。だから、目が覚めたとき紫苑が側に居てくれるのではないかと思っていた。心配したと、そう

言ってくれるのではないかと。

そんなわけがないのに……。桔梗は小さくため息をつく。自分は紫苑の何でもない。行くあてのない子供だから、側に居ることを許されている。それだけなのだ。

「……わかってるけど」

「桔梗さま？」

小雪に見えないよう、顔を俯ける。じわじわと視界が白く塗り潰されていくのを止めることが出来ない。白い頬が濡れた。

「そんなこと、わかってるけど」

あのととき……突き刺さるほどの殺意を感じて。菊が消えてしまつて。頭上に白刃が煌いて。

「怖かったんだ……」

紫苑に、守って欲しかったんだ……。

二

蘇芳は目の前の紫苑に向かい、軽く頭を下げた。

「迷惑を掛けたな」

短い言葉だが、それは紫苑の驚愕を誘うに十分すぎた。

「父上」

「浅葱は無事だ」

紫苑に何か言わせまいとするように矢継ぎ早に畳み掛ける。

「聞けば伴雅どのもお命に別状はないとのこと。雅哉どのもだ」

「……………」

「これで内々に解決できるだろう。今上のお耳に入ることもあるまい」

「父上」

「表向きには何もなかったことになる。伴雅どのにはしばしの療養が必要だろうが……」

「父上！」

紫苑は強い口調で呼び掛けた。

「何を恐れておいでなのです」

「……………」

蘇芳は押し黙った。

自分に対して常になく饒舌な蘇芳　その奥に秘められた真情に
気付かぬほど、紫苑は鈍感ではなかった。そして、彼の恐怖の対象
が何であるかも既にわかっている。

「我が家に居る…………水龍のこと、ですか」

「……………」

蘇芳は頷いて見せた。声を潜め、囁く。

「幼体のうちに、殺してしまえぬか」

「……………！！」

瞬間体中をめぐった激情を、紫苑はかろうじて制御した。

「それは無理です。あれは、ふつうの水龍ではありませんから」

「どういうことだ」

「魂に青龍を宿していると、朱雀がそう申しおりました」

「…………馬鹿な」

蘇芳は啞然と口を開ける。

「現に」

紫苑は淡々と言葉を継いだ。

「あれは成体にもなるのです…………特に、生命の危機を感じた時には」

「…………つまり」

「私はあれに勝てません」

「……………」

蘇芳は口をつぐんだ。紫苑が勝てないということ　それはつまり
り、人間の力では誰も彼女を制し得ないということだ。

「さいわい」

紫苑は曖昧な笑顔を作って見せた。揶揄するような、底冷えのす
る笑み。

「彼女は私を慕ってくれている……彼女が成体になった時にも約束してくれました。『私を困らせるようなことはしない』と」
「信じるのか」

「ええ」

「何故」

「彼女は」

紫苑ははつきりと唇に笑みを刻んだ。眼だけはまっすぐ蘇芳を見据え、言う。

「彼女は『あやかし』ですから」

「……………」

蘇芳は気まづげに目をそらし、そのまま低く唸った。

「お前は」

「……………何ですか？」

「お前は裏切るまいな？」

「何をです」

「決まっておるだろう」

蘇芳は苛立った様に膝を進め、紫苑の瞳をじっと見つめた。

「お前は『ひと』を裏切るまいな？」

「……………」

紫苑は黙ったまま義父を見つめ返す。その眼に映る自分の瞳はやはり紫電の色で……。

「私が『ひと』の世に居ります限りは」

紫苑は深々と頭を下げ、義父の視線を遮った。

脳裏に浮かぶ桔梗の顔。それはあどけなくも可憐で、純粋な笑顔だった。

久しぶりの深い眠りだった。ずっと彼を苦しめていた悪夢も消えた。

「丸一日眠っていたのだぞ」

兄に言われ、伴雅は気まずそうに笑う。その腕には彼自身のつけた傷が残っていた。紫苑が手当てをしてくれたが、痕は残るかもしれないという。だが、それでいい。この手で自分を壊そうとした、その愚かさの証としていつまでもこの身に刻み込んでおけば良いと……。

「兄上」

伴雅は側に座る雅哉に向き直った。

「本当に、申し訳ありませんでした」

深々と頭を下げる。雅哉は苦笑したようだった。

「もう良い。何もなかったのだ。そう思え」

「しかし」

「もう良い」

「……はい」

「北の方が随分心配していたぞ。謝るのならそちらにしろ」

「……はい」

伴雅は零れ落ちそうになった涙をかるうじてとどめる。

「兄上」

「なんだ？」

「あの、あやかしなのですが」

「……」

雅哉は緊張の面持ちになって伴雅を見守った。彼は兄の視線の陰しさには気付かず、

「彼女は 私を救ってくれたのかもしれない」

「え？」

思いもかけない言葉を聞き、雅哉は眼を瞬いた。伴雅は雅哉を見て微笑んだ。

「そう思つのです」

お前は何故そうまでして自分を苦しめる？ 涼やかな声でそう問われたとき、彼の心の中で何かが弾けた。

「彼女は厳しかったし、勿論私はあれが怖かった」

伴雅は吐息をついた。

「けれど……彼女のお陰で、私は自らの内に巢食つもののけと相对することが出来たのかもしれない」

「……………」

雅哉は呟いた。

「『水龍族の正当なる末裔 選ばれし御子』か」

それは彼女が口にした言葉だった。

「兄上？」

「あのあやかしは 確かに普通ではない」

「……はい」

「その存在は、今は伏せておくしかないな」

「兄上がそう約束なさったのでしたら、私も」

「ああ」

そうせねば命がない、とは言わなかった。

孤高の陰陽師を思い浮かべる。長い黒髪と紫電の瞳、ひとでもあやかしてもないその存在……。

約束しよう。

「彼のため か」

どこか胸騒ぎを覚えながら、雅哉は弟の手をぎゅっと握った。

四

その日は夕方から酷く冷え込んだ。桔梗は火鉢の前から動かない。泣いたせいか、頭が重かった。

「私、何が欲しいんだろう……」

桔梗はつぶやく。自分は何を物足りなく思っているのだろう。衣食住の全てを保証され、式神にまで守られて 大切に扱われているのに。 どうしてこんなに寂しいのかわからない。

「桔梗」

「わっ」

不意に声を掛けられて、桔梗は飛び上がった。

「何をそんなに驚くことがある」

背後に立つ紫苑は、彼女がそれほど驚いたことにむしろ驚いているようだった。

「な、何ですか？」

振り向くと、紫苑は帳の外 庭の方を指差して見せた。

「良いものを見せてやろう」

「え？」

「外だ」

「外は、寒いです……」

素直になれなくて渋る桔梗に、紫苑は苦笑を投げかけた。

「お前は猫か」

「え？」

「いいから来い」

「え、でも」

「ほら」

脇に抱えていた衣で桔梗をすっぽりと覆い、そのまま軽々と抱き上げる。

「し、紫苑！」

「落ちるなよ」

おそるおそる紫苑の肩に腕を回すと、そうしていると言われた。ひんやりした彼女の指先に、紫苑の少し高い体温が伝わる。

紫苑は帳をあけて濡れ縁に出た。既に日は沈み、宵闇が深く辺りを浸している。そして。

「な、何？」

白い粉のようなものがひらひらと舞い落ちていた。辺り一面、きらきらと光っている。

「雪だ」

紫苑は短く答え、縁に腰を下ろした。膝の上に彼女を載せ、軽く揺すぶって位置を落ち着ける。

「綺麗だろう」

「……はい」

もうとつくに収まったと思っていた涙が、また溢れそうになった。だが先ほどまでの涙とは意味合いが違う。

「桔梗？」

「…………」

「泣いているのか？ どうした？」

紫苑は驚いて尋ね、桔梗の銀髪をその不器用な指でやわやわと撫でる。

「もう、寒くないです」

桔梗は両頬に涙の流れた痕をつけたまま、顔を上げて笑った。

「あったかい……」

「…………」

紫苑の腕の中は暖かい。何が起きてもここに帰って来られるのなら、自分は何も恐れなくていられる。そんな気がした。

「綺麗だろう？」

「……はい」

お前にこの世界の綺麗な所を沢山見せてやりたい。紫苑は口に出さずにそう思った。ひとの世は彼らに冷たい。だが、世界はひとだけのものではないのだ……。

「ねえ、紫苑」

「何だ？」

腕の中で丸くなった桔梗が、紫苑の顔を見上げている。その表情はどこか「桔梗」のものとも似て……。

「何だ？」

「私があの時殺されていたら」

口を挟もうとした紫苑を、桔梗は手を翳すことで止める。

「紫苑は泣いてくれましたか？」

「……………」

紫苑は桔梗を見つめた。その薄氷色の瞳に、自分の顔が映っている。

「私は、きっと……………」

伴雅を殺していた。

低くつぶやかれた言葉に、桔梗は眼を見開いた。

「……………」

言葉が出ない。

紫苑は庭に降り積もる初雪を眺めている。桔梗は黙ったまま紫苑の肩に頭を寄せた。暗い夜を染める白い雪。桔梗の額にかかる紫苑の暖かな呼吸。そっと背中になわされた手は大きく。

もう寂しくはない。けれど、胸が痛い。多分それは、切なさだった。

燐の巻

第一章

一

その屋敷は、主が住まう様子もなくひっそりと静まり返っていた。東大路に面した大きな屋敷である。放っておけば荒れ放題になるはずのところだが、何故かここはそうなっていない。

年の瀬も押し詰まった頃の夕刻、その門の前に一台の牛車が止まり、中から人影が降り立った。御門紫苑である。

「……………」

どこか懐かしいような、それでいて哀しいような表情で屋敷をしばらく見つめていた彼は、やがて振り向いて牛車の中に声を掛けた。

「桔梗」

「はい」

「出てきていいぞ」

銀髪が宙を舞い、牛車の中から一人の少女が降り立った。幼女の装いをした彼女は、実はあやかしである。だが、陰陽師である紫苑の側にいることがさいわいして、彼女はまるで式神であるかのようにひとびとの目に映った。

「ここは、どなたのお屋敷ですか？」

「……………」

紫苑は口を噤んだまま桔梗の背を軽く押す。踏みしめられた枯葉がかさかさと音を立てた。

中庭に面した奥の間に進んだ紫苑は燭に火を灯した。まだ闇には間があるが、手元で作業をするには不自由である。

「……………」

きょとした表情で見守る桔梗をよそに、紫苑は取り出した符を人型に切った。口中で呪を唱え、ふつと息を吹きかける。人型の紙はふうわりと舞い上がり、庭に落ちてひとになった。簡素な平服を纏った、従者風の男。

「わあ」

桔梗が感嘆の声を上げる。口元に小さく笑みを浮かべた紫苑が小声で何ごとか告げると、その男はすうつと虚空に溶け消えた。

「桔梗」

「はい」

男の行方を追ってきよろきよろしていた桔梗に、紫苑は声を掛けた。

「今夜、この屋敷の主が帰ってくる」

「……はい」

「その男は、私の友達だ」

「ともだち？」

聞きなれない言葉に桔梗は首をかしげる。紫苑は苦笑した。

「ああ。私の唯一の友達だ」

紫苑は彼女に向き直った。

「お前をあゝの屋敷に置いてくるのが不安だったから連れてきたが、いくらあの男でもいきなりお前を見れば驚く。おいおい話していくつもりではあるが、とりあえず今夜は帰京祝いが先だ。だから」

「だから？」

「お前は別室に」

「あれ？」

突然、中庭に人影が現れた。

「紫苑、もう来ていたのか、早いなあ。まだ何のもてなしの用意も

していないよ？」

「……紫苑？ 大丈夫ですか？」

突然床に突っ伏してしまった紫苑を心配するように、桔梗は小さな手のひらで彼の背中を撫でた。

「おや」

中庭の男は目を瞬かせ、桔梗をじいつと見つめた。物腰の柔らかさ、というよりもどこか力の抜けた、温厚そうな好青年である。年は紫苑と同じくらいであろう。髪も眼も、色素が薄い。

「水龍、かな？」

ぽつり、と呟いた瞬間、彼の眼に一瞬だけ凄みのある光が射した。桔梗が驚く間もなく、その光はすぐに消えてしまう。

「はじめまして」

男は桔梗の方に右手を差し出して微笑んだ。

「橘^{たちばな}燐といいます。よろしくね」

「よ、よろしく……」

やややわと握り返すと、燐はますます笑み崩れた。

「水龍にもこんな可愛い女の子がいるんだ。紫苑、良く探してきたなあ。てつきりもう絶滅してるもんだと」

「燐!!」

紫苑ががばつと体を起こした。

「お、お前何故急に」

「急につて。今晚つて文で知らせただろう？」

「しかし、宮中に参内するとかしてもつと遅くなるものだ」と

「宮中？」

燐はひよい、と肩を竦めた。

「あんなところに用はないよ。まあそんなことはともかく」

燐は再び笑みを浮かべた。

「紫苑、この子どこから見つけてきたの？」

桔梗の銀髪をふわふわと撫でながら尋ねる。

「見つけてきた、というか、その……」

「うん？」

「拾った、というか」

「拾った？」

「後で話す」

紫苑はそう言うと、手を高く打ち鳴らした。すると簾が巻き上がり、そこから何人かの女房たちが幾皿も料理を運んでくる。

「家神たちを借りたぞ」

「うん」

「おいしそうですね！」

嬉しそうに笑う桔梗の髪を紫苑はくせのように撫で、そして微笑んだ。

「……………」

まるで仲睦まじい親子のような様子のふたりを見て、燐は瞬きを繰り返していた。

三

全くいつの間に呑んだのだか。紫苑は桔梗の側に転がる甘酒の杯を見て眉を顰めた。当の桔梗は満腹感と酔いのせいだろう、すっかり寝入ってしまったている。すでに子の刻に近付いているから眠くなって当然かもしれない。

「冷えるぞ」

紫苑は独り言のようにつぶやくと、彼女の体の上から自分の羽織っていた単の着物を掛けた。

「どうしたの、紫苑」

燐が杯の端を舌で舐めるようにしながら悪戯っぽく問い掛ける。

「僕のいない間に何があったわけ？ どうしていきなり父親になってるのさ」

「父親になどなっていない」

「じゃあ何？」

「……………」

紫苑は少し首を傾げて考えたが、やがてぼつりと呟いた。

「保護者？」

「最強のあやかしに保護者なんているのかなあ」

「しかし」

燐の瞳に投げられたのは思いのほか強い眼差しだった。

「あいつはひとりなのだ」

「……………」

燐はため息をついた。

「だから、拾ったの？」

「……………」

「放っておけなかった？」

紫苑は曖昧に頷いた。

「敢えて理由をつけるなら、そういうことになるのだろうな」

「でも危険だなあ。水龍といえばかつての朝敵だよ？ 他人に見つ

かったらただじゃすまない」

「わかつている」

「本当に？」

燐の目が哀しみと怒りを宿した。

「君は全て見ていたはずだ。僕と彼女の辿った運命を」

「……………」

「それでもいいと、そう思うの？ それだけの覚悟があるの？」

「……………」

紫苑は微笑んだ。暖かな、それでいて切なげな笑み。燐は詰問口調になっていたことに気付き、口を噤む。

「もう、始まっているのだ」

そう切り出すと、紫苑は訥々と語った。桔梗との出会い。もう一人の「桔梗」。青龍を宿すその魂。藤原兄弟とのこと。燐はただ黙って耳を傾ける。

「……きつともうすべては始まっている」
紫苑はつぶやいた。

「『桔梗』の語る運命が何かは知らない……だが、きつと」
燐はゆつくりと頷いた。

「君と桔梗ちゃんは出会ってしまった……それは変えようのない事実なんだね」

「ああ……」

「僕と彼女が出会ってしまったように……」

燐の浮かべた微笑みの中に宿るもの。それはまるで、諦念だった。

四

翌日の深夜、橘邸にひとりの男がやってきた。紫苑と桔梗は既に帰宅している。紫苑が貸してくれた式神と共に屋敷の片付けをしていた燐は、突然の来客に眼を見開いた。

「有平」

遠野有平という名のこの男は、燐の乳兄弟である。

「燐さま」

有平は小柄な体をすくめるようにしながら、彼の前に座った。

「どうかしたの？」

「まずは無事のご帰京、おめでとうございます」

「ありがとうございます」

「実は、その、申し上げにくきことがあるのですが」

「何？」

有平は観念したかのように一息で言った。

「宮中にて……橘家を取り潰そうという動きがあるのです」

「何だつて……?!」

燐はさすがに色を失った。

彼の父母はもうこの世にいない。妹がふたりいたが、どちらも若

くして死んでしまった。確かに今橘家直系の血をひくものは憐しいないが いや、彼がいるにも関わらず取り潰そうというのである。「それは……やっぱり」

「ええ」

有平は痛ましそうに目を伏せながら言った。

「あの方のことが……」

「……………」

憐はすうつと無表情になった。

「……そう」

「憐様？」

「別にいいよ」

どこか深く暗い場所から浮かび上がってきたかのような、彼の笑み。

「僕にはもう失うものなんてない」

「憐さま！」

「そうだろ？ 有平」

「そんな」

「あの時全部終わったんだよ、僕は……」

「そんなことを仰らないで下さい、私は」

「もついいんだ、有平」

憐は穏やかに笑った。

「僕は帰ってくるべきじゃなかった」

「私は！」

有平の瞳から涙が一筋零れる。

「私は憐様にお会いしとうございました」

「僕も君が懐かしかったよ」

憐は微笑む。

「紫苑にも会いたかったしね」

彼の巻き込まれた運命を見届けたくはあるのだけれど……。

「御門様は反対しておられます。橘家は由緒ある名家。取り潰すこ

とは先人たちに申し訳が立たぬと」

「彼らしいね」

あくまで私情を見せることなく燐を庇おうというのだろう。あのときと同じだ。 あのときと……。

「ありがとう、有平」

燐はすつと立ち上がった。

「知らせてくれて助かったよ」

「明日にでも御自ら出仕なされてはいかがですか」

「針の筵に座るのは嫌だなあ」

冗談めかして燐は笑った。

「ま、とりあえず今日は帰りなよ。もう遅いしね」

有平は唇をかみ締めた。本当はもつと言いたいことがあるのだろう。しかし彼の燐への遠慮がそうはさせない。

「……夜分遅くに失礼致しました」

「ううん、君の好意はわかってるよ」

取り潰されかねない橘家を訪れれば、遠野家にまで類を及ぼしかねない。それでも訪ねてきてくれた有平の想いを 自分は無駄にするかもしれない。

「おやすみ、有平」

「……おやすみなさいませ」

彼を戸口まで送り届けて、燐は夜空を見上げる。厚い雲に覆われた寒空には、星の一つさえ見せる優しさもなかった。

第二章

一

橘家は由緒ある家柄である。代々式部省に務め、燐の父親である

龍秀は式部大輔に任ぜられた。式部省の長官である式部卿は親王が任ぜられるのがしきたりであるため、次官とはいえ事実上の最高位である。彼らは紀伝道に通じた学者の家系であり、藤原氏が台頭してきた昨今とはいえ宮中における発言力は決して小さいものではなかった。燐自身、文章生として大学寮で紀伝道を学び並ぶものなほいほど良い成績を収めた。父、龍秀亡き後は若くして式部大夫に任ぜられ、将来を嘱目されていたのだが。

紫苑はため息をついた。宮中に出仕して朝議の席に着いていたのだが、どうしてこうも殿上人たちは橘家を潰してしまおうとするのだろうか。確かに不幸続きで直系の血を引くものは燐しかない。いや、燐がいれば十分ではないのか。しかし、自分が下手に弁護すれば彼の立場はさらに悪くなる。紫苑はじつと黙っていた。

燐はこの場にいない。いない方が良いのか、いた方が良いのかどちらにせよ辛い目を見ることがだろう。それを思うと胸が痛んだ。摂政、藤原時雅がそんな紫苑をじつと見ている。側に控えて座している雅哉がそんな彼の耳元に何か囁いた。彼は重々しく頷く。

「各々方」

時雅の低く通った声が場を打った。

「ここで今上にお考えを賜ろうと思考するがいかがか」

一瞬の沈黙の後、皆口々に同意を示す。

「いかがでございましょうか」

御簾の前に居住まいをただし、時雅が内側に座す今上に尋ねる。

「橘家の処遇、いかが所思召されます」

「……橘家には、長男がいたであろう」

澄んだ声が、静まり返った朝議の間に響いた。今上は御年十七歳。無論既に成人していると見なされる年齢ではあるが、それでも若過ぎる節があるのは否めない。未熟な正義感の時として人を傷付ける。

この時もまさにそうだった。

「彼は、陰陽博士と親交が深かったのではなかったか。朕は彼の意見が聞きたい」

「……ほう」

時雅は頷き、紫苑にちらと視線を投げた。

「との仰せだが。御門殿、何か仰りたいことは？」

「……私めがこのようない大事に口を挟むのはいささか僭越かと」
深く頭を垂れ、紫苑は静かに言う。

「そう言うな、紫苑」

今上は重ねて言った。

「そなたは良く知っているのであろう？ あの時のことを」

「……………」

紫苑は体を堅くする。

「あの時朕はまだ幼かった……そなたの口から教えて欲しいのだ」
その時、空の一角が一瞬赤く染まった。同時にぱん、と乾いた音が小さく響く。皆一斉に腰を上げた。

「……………」

時雅の元へ末子、蓮が走りより何事か囁く。それを耳にした時雅は顔色を変え、紫苑を手招いた。

「橘の屋敷が燃えておるそうだ」

「……何ですって？」

紫苑は思わず大声を上げた。

燐……！

二

御門家の屋敷と橘家の屋敷はかなり離れている。それでも、桔梗の耳には路傍で騒ぐひとびとの声が聞こえていた。側に控える小雪は厳しい顔をしている。桔梗は落ち着かない様子でそわそわとしていた。

「ねえ、何が起こっているの？」

折しも、烏の姿をした羽櫻が飛び込んできた。小雪の耳元で何か嘴を動かして囁くような仕草をした後、またぱつと飛び去っていく。

小雪の表情はさらに険しいものとなった。

「小雪さん？」

「…… 火事だそうです」

桔梗の不安そうな様子に気付いたのだろう、彼女は少し表情を緩めた。

「紫苑さまはすぐにはお帰りにならないかもしれませんが、心静かにお待ち下さいませ」

「火事って、どこが？ どうしてこんな騒ぎになっているの？」

「それは」

小雪は言葉に詰まった。

「紫苑は危なくないの？」

「それは、大丈夫だと思いますよ」

「……………」

桔梗の水色の瞳が憂いを湛えて外を見遣る。

「紫苑……………」

三

貴女と出会ったのは、雪深い比叡の山の中。気紛れに遠出したところ吹雪に見舞われ、もはや馬で駆けることもままならず、僕は轡を引いてどこか避難できる場所を探していた。

はつきりと覚えているよ。貴女を初めて見たときのこと。真っ白な雪の中、そこだけが色づいていた。貴女はさくら色の髪をしていたから、とても目立っていたよ。

馬のいななきに気がついて、振り向く。驚いた顔。大きく見開かれた瞳。

一瞬は警戒したようだったが、僕のあまりに情けない姿を見てすぐに手を差し伸べてくれたね。

「おひとりですか？」

「……ええ」

馬の轡を貴女の手が受け取ってくれた。

「私の家にご案内します。このままでは凍え死んでしまっわ」
「でも」

悲しいことだけど、僕の中にも警戒はあったのだ。あやかしの家に呼ばれていいものかどうか……。でも、それは貴女をひどく傷付ける考えのような気がしたから。そして、友人のことが思い浮かんだ。彼はいつだって冷静を装っている。でも本当は、ひと倍傷つきやすい繊細な男だ。それを僕は良く知っているから、口に出したのは別のことだった。

「ご迷惑でしょうか？ ご家族は？」

「居りませんわ」

そう言うつと貴女は僕から目を逸らした。

「比叡の山寺の者の手にかかって 命を落としました」

「……………」

あのとき、僕は正直凍死してもいいから貴女の前から消えたいと思った。僕が余程ひどい表情をしていたのか……貴女は気を遣うように笑って、首を横に振ったね。

「貴方のせいではないのだから、そんな顔をしないで」

「……………」

「遠慮せずにいらして下さいな」

「しかし」

「お代のことなら後ほどしっかり頂きます。心配なさらずとも、ね」
冗談めかした口調は、あまりに優しかった。貴女の気遣いが胸に沁みて、何だか泣きたくなったのを覚えているよ。

さくら。

貴女にこの名前をつけたのはいつだっただろうね。本当の名前を教えてくださいなから、あの後僕が勝手にそう呼んでいたのだけ。

さくら。

この名前を気に入ってくれていたのかどうか、確かめる術はもうないけれど……でも僕が呼ぶたびに貴女は嬉しそうに頬を染めていたね。

さくら。

もうどれだけ呼んでも届かない。どうして、どうして、どうして、どうして……。

「さくら……」

貴女の側に、ゆきたい。

四

紫苑が橘の屋敷の前に駆けつけたときには、既に中に入れる状態ではなかった。燃え盛る炎が冬空を舐めている。火の粉が時折ぱつと舞い上がって、野次馬の中から悲鳴が上がった。

「中から誰か出てきたか?！」

紫苑は辺りにいた若者に問うた。

「いや……見ていません」

彼の剣幕に気圧されるように、若者は首を横に振る。紫苑は唇を噛み締めた。

「……燐」

中にいなかったのならいい。しかし……もし巻き込まれているとしたら。最悪 自ら火を放ったのだとしたら。いや、そんな馬鹿なことはしないはずだ。燐はそれほど弱い男ではない。紫苑は彼を信じている。

紫苑は呪札に術をかけ、それを鳥形の式神にして屋敷の中へと飛ばした。念を込めて人の気配を探るが、特に何も感じられない。

ということは中には誰もいないということか。ほっと息をついたとき、紫苑の隣りに立ち並ぶ者の気配がした。振り向くと、遠野有平だった。

「燐……さま」

力が抜けたようにがくりと座り込む。その顔色は蒼白だった。

「有平どの、お気を確かに」

「……み、御門どの」

有平はかろうじて顔をあげた。

「わ、私が要らぬことを申したばかりに……！」

「落ち着かれよ。中には誰もおらぬ。無人だ」

「……」

有平は口元を喘がせ、やがて大きく息をついた。

「で、では燐さまはご無事で……？」

「居場所はわからぬが、無事だろう」

「……良かった」

有平は涙を零した。

「本当に……良かった」

「有平どの」

紫苑は控えめに問いかけた。

「先ほどの……要らぬこととは何です？」

「……」

有平は少し俯いたが、ぽつりぽつりと答えた。

「橘家が断絶の危機にあると聞いたので、燐さまにお知らせ申し上げたのです。自ら朝議の場に出て抗議していただきたいと思い……」

「……そうか」

紫苑はため息をついた。彼は敢えて燐には言わなかったのだが、無論有平に悪気はない。彼の気持ちも理解できる。しかし、燐にとっては打撃だっただろう。三年前、愛するものを奪われると同時に京での居場所も失った。そして彼は留学との明目で遠く唐の国へと追い払われ……ようやく帰ってくる事が出来たと思えば、自らの血筋が断絶の危機に見舞われていたのである。

燐が何の罪を犯したか。紫苑は声を大にして叫びたい。

彼がしたこと。それは愛したこと　あやかしを愛したこと。そ

れだけだった。

第三章

—

屋敷に戻った紫苑を出迎えたのは、蒼い顔をした小雪だった。
「どうした？」

胸騒ぎを抑えながら紫苑が尋ねると、

「桔梗様が……どこにもいらっしやいません」

小雪の唇が震える。

「何？」

「少しの間目を離れた間に、忽然と」

「消えたというのか?!」

「はい」

紫苑は小雪を軽く押し退け、桔梗の部屋に向かった。確かに人気はない。だが、文机の上に置かれた紙にふと眼が止まった。

呼ばれた。山へ行く。

それだけの文字が、流れるような筆跡で書かれている。

「これは誰が書いたものだ？」

後に続いてきた小雪に尋ねる。小雪は首を左右に振った。

「存じません。桔梗様がいらっしやらなくなって、この紙だけぽつんと置かれていました」

「そうか」

桔梗の筆跡とは似ても似つかない。だが、これを「桔梗」が書いたとすれば……。

「山……比叡か」

山といえば、比叡山を指す。都の北西、鬼門の方角に位置し、都

を災いから守る役目を果たす山だ。

紫苑は小雪に問いかけた。

「誰か、屋敷を訪ねてきたものはいたか？」

「いいえ」

即答した彼女に、紫苑はあることを確信した。

「出掛ける。馬を出してくれ」

「はい」

小雪の後ろ姿を見送り、紫苑は深々とため息をつく。「桔梗」がどうして「呼ばれた」と書き残したのかは分からない。だが、彼女を呼んだと思われる相手なら分かっていた。

燐。彼はどうして「桔梗」を　水龍の御子を呼んだのだろう。一体何を望んでいるのだろう。

「……………」

脳裏に閃く可能性を打ち消すように、紫苑は髪をぎゅっと束ね、出掛ける用意をした。

二

「それはできません」

「どうして」

貴女を困らせていることなんて百も承知だった。

「山を降りて。僕の屋敷に来て」

愚かだったと今なら分かる。貴女の危惧は正しかったのだから。

「ここに通っていただくわけには行かないの？　遠過ぎる？」

僕はあの頃毎夜のように貴女の元へ　比叡の山深くにある貴女の庵へと通っていたね。あの時、出逢って数ヶ月は経っていた。

確かに都からは遠かった。でも、そんなことが理由じゃなくて。「ずっと側にいて欲しいんだ」

「……………」

貴女は少し頬を染め、でも困ったように微笑んでいた。

貴女はとても優しくかった。豊かな自然に囲まれて育ってきたせいか、繊細な感受性と大らかな包容力を同時に持ち合わせていて、だから貴女の側はとても居心地が良かったんだ。

他人の眼ばかりを気にして競い合うことしか知らない宮中の者たちよりも、貴女はずっと気品があった。半妖である僕の友人が口さがなく貶められていることを聞いて、貴女はとても哀しそうだったね。

そういえば、貴女は一度紫苑に会っている。貴女が山を降りる決意をする少し前、僕らは三人で花見をした。貴女の庵の近く、そう、あの峠。貴女の髪や眼と同じ色をした花びらが、ひらひらと舞い散って……紫苑は眩しそうに僕らを見つめていた。

彼は貴女が山を降りることはあまり賛成していなかった。身をもってあやかしへの風当たりの強さを知っていたからだろう。僕もそれは知っていた。いや、知っていたつもりだった。それでも僕は貴女を守れると思っていた。誰にも貴女を傷付けさせはしないと。

傲慢だったね。

「夢いな」

花びらを見つめて言った僕に、貴女は笑って首を左右に振った。

「また、来年も咲きますわ」

優しい眼差しで木々を見つめ、

「花を落として葉をつけ、実をならせて……命は続いていく」

「そうだな」

紫苑は酒盃を重ねながら、顔色一つ変えずに頷いていた。

「たとえ私たちの目には見えなくとも、生きていることには変わらない」

「ひとは目に見えるものにとらわれがちだね。気をつけなきゃ」

本当に夢かったのは、貴女の方だったのに。

ああ、僕は帰ってくるべきじゃなかった。ずっと唐にいれば良かった。この国には、貴女との思い出が溢れている。部屋にも、屋敷にも、街にも、山にも、風にも、空にも、全て。貴女と重ねた記憶が僕を苛むんだ。

それでいて、僕は探している。貴女との思い出を、一つ残らず集めようとしている。それが、僕を殺すことになるうとも。

三

さくらの住んでいた庵のあった場所を、燐の体は覚えていた。庵は跡形も無く、すっかり荒れ果てていたがそれでもなお、風景は当時の名残をとどめている。

粉雪がはらはらと舞い散っていた。

燐は馬を降り、冷たい土の上に体を横たえた。灰色の空から、白い雪。まるで花びらにも似た。この冷たい土の下、さくらがいる。彼女の亡骸を運んだ日のことを思い出し、燐の眦を涙が伝った。

もう、何もない。

父母はとうの昔に死んでいる。姉妹もまた、流行り病で命を落とした。そして、

「貴女はいない……」

ふと、旧友の顔を思い出す。紫苑にも家族ができたようだった。

純粹な、水晶のような眼をした少女。彼女が水龍族だと気付いたときは慄然としたが、彼女の言動を見ていると本当にただ幼い子供で。そして紫苑をとて慕っていて。親子のようで微笑ましかった。もう、紫苑は独りではない。ただ、彼らの行く末は気になるところではあるのだが……。

「できれば、あの子に」

桔梗、と言っただろうか。あの水龍の子供には、

「僕らのこと……知って欲しかったな」

ひとりでも多くさくらのことを覚えていて欲しい、それだけのことなのかもしれない。それでもひととあやかしの間に育まれた愛が辿った悲劇は、決して彼らと無関係ではないはずだ。桔梗が、紫苑を想うのならば。

「紫苑は知っているはずなのにね……」

それでも紫苑は彼女を手元に置こうと決めたのだ。彼らの悲惨な末路を見届けていながら。

「何故なんだろう……」

少しずつ、手足の感覚がなくなってくる。どこか柔らかな綿の上を浮遊するような錯覚を覚え、燐は眼を閉じた。その睫毛の上にも雪が降り積もる。少しずつ、雪は大粒になってきていた。このまま大地に埋まってしまいたい。

「もう、疲れたな……」

燐は大きく息を吸い込んだ、そのとき。

「逝くのは少し待て」

涼やかな声が空間を震わせた。

燐は眼を開け、声の方角を探る。彼の右方、葉を落とした木の太い枝の上。雪と見紛うほど白くすらりと伸びた足がぶらぶらと宙を蹴っていた。

「誰……？」

「私を呼んだのだろうか？」

一瞬の後、燐は頭上から彼女に逆さまに見下ろされていた。長い銀髪が、彼の凍えた頬に落ちかかってくる。冷たい瞳は、まるで雪の結晶のようだ。

「正確には私ではなく、もう一人の『私』だが……『彼女』にはお前の呼びかけに応えるほどの力はないからな」

「え？」

燐は瞬きを繰り返す。そのあやかしは静かに微笑んだ。

燐ははたと気付いた。彼女は水龍族。絶滅したはずの。そして現存する最後の水龍族とは……。

「…………桔梗……ちゃん？」

「そう」

「桔梗」は艶然と微笑んだ。

「姿もこころも違うが、確かに私は『桔梗』だ。そして」

長い指先が自身の胸元を滑る。

「水龍族最後の『御子』」

「みこ……？」

「お前の『声』に呼ばれたのだ。あまりにも強い『声』だったものだから」

燐は呆然と「彼女」を見上げ、問いかける。

「どうして貴女は姿形を変えているの？ それに……人格も違うみたいだし」

「そんなことは後で紫苑が説明してくれる。間に合えば、な」

「間に合う？」

「彼は、お前を逝かせたくないようだ」

「……………」

燐は眼を伏せた。「桔梗」は彼の動揺には気付かぬように、

「私は違う。お前が死のうが死ぬまいが、そんなことは知らない。

お前の望みを妨げるだけの理由など私にはないからな。ただ」

「彼女」の言葉は淡々として、なおかつ厳しさを秘めていた。

「お前は『私』を呼んだ。『私』に何らかの話を聞かせたいと望んだ。それは現世に対する心残りとも言えるだろう。『私』はそれを解消してやるつもりだ。それが終わったなら」

「桔梗」は薄く微笑んだ。優しくもなく、それでいて嘲っているわけでもない。何ともいえない笑みだった。

「好きにするがいいさ」

「……………」

燐は暫く黙然と「彼女」の顔を見ていた。やがて意を決したように言葉を発する。

「僕の妻は、あやかしだった。そして」

彼の血の気の失せた喉元がごとりと動いた。

「人間に殺されたんだ……」

第四章

—

「桔梗」は顔色ひとつ変えず、先を促した。

「それで？」

燐は言葉を続ける。

「僕が屋敷にあやかしを囲っているという噂は、あつという間に都中に広がった。あることないこと陰口を叩く奴らもいたけど、さくらの耳には届かないようにしていたし、僕自身何も気にならなかった」

彼女が側にいてくれれば何も要らない。そう思っていた。

「さくら　というのか、そのあやかしは」

「僕のつけた名前だよ」

「……そうか」

ふわり、と微笑む。鋭利な印象を残す美貌があまやかにとろけて、燐は虚をつかれたように瞬きを繰り返した。「桔梗」は表情を華やかせたまま言う。

「私の名も紫苑にもらったものだ。さくらはきつと嬉しかっただろうな」

「……うん」

そう思いたい。少しでも、彼女にしあわせを与えられたのだと……。燐の眦を涙が伝った。

「彼女が僕の屋敷に来てしばらく経った頃ね。彼女の身体に異変が

起きたんだ」

「異変？」

燐は泣き顔のまま微笑む。

「僕らの子供を、授かったんだ」

「……そうか」

「嬉しかった。本当に嬉しくて嬉しくて……毎日毎日名前を考えた」
二人で顔をつき合わせ、女の子だったらどうしよう、男の子だったらどうしよう……そうやって考えている時間が何より楽しかった。
「紫苑は最初とても複雑そうだったんだ。ひととあやかしの子供は禁忌、そうやって身をもつて扱われてきたのが彼だから」

「……」

「でも、僕は言った。僕らは決して子供を捨てない。そして」

燐は親友の顔を思い浮かべるように目を閉じた。

「どうか、僕らの子供を可愛がってやって欲しいって」

半妖でも幸せになれると、知って欲しい。

「桔梗」はひどく穏やかな顔をして燐を見つめていた。その視線の先で、燐の表情が歪む。

「だけど」

その子供は生まれることはなかった。

「今日と同じ、こんな天気の日だよ」

燐の頬は雪に叩かれ、すっかり冷たくなっていた。

「僕の屋敷に賊が侵入したという知らせがあつて、僕は宮中から慌てて戻った」

そこで彼が見たものは……。

「……屋敷にいた使用人たちは、皆縛り上げられていた。そして」
燐の喉が詰まる。

「……さくらは……」

「殺されていたのだな？」

「桔梗」の静かな声が辺りを打った。

「……」

燐は頷く。

「……あれは、さくらを殺すための刺客だったんだよ。あやかしが都に住んでいることに耐えられない、そう思ったものがいたんだろうね。どこの手の者かは今でも分からない。でも、使用人たちは彼らの目的が分かっている、あっさりと縛り上げられたんだ。わざわざ身を挺してあやかしを守ろうとするものなんて、いなかったんだ」
彼女を守ってやれなかった……。脳裏に彼女の最期の言葉が浮かぶ。

「ごめんなさい……赤ちゃん、守れなかった。」

「燐」

「桔梗」の強い声が彼の耳に響いた。

「お前は私がさくらの二の舞を踏むのではないかと　ただでさえ敵の多い紫苑のことなのだから、と……そう考えたというわけだな？」

「……………」

燐は頷いた。

「桔梗」は冷たい笑みを刻む。

「安心しろ。私は強い。紫苑に守られなくとも……生きていける。私が紫苑を守る。それに」

燐は続けられた言葉に慄然とした。

「私には都の人間を皆殺しにするほどの力がある」

「私や紫苑に仇なす者たちの巣窟なら、滅ぼすことに何の躊躇いもない。あっさりとそう言い放つ。」

「だが、紫苑は殺生を嫌がる。無下にそのようなことはしない」

「桔梗」はその氷の結晶のような瞳で、燐を見つめた。

「お前のさくらと私は違う。安心したか」

「……………」

「私は、自分の身ひとつ守れぬ弱いあやかしではない」

「さくらは悪くない！」

燐は身を起こした。

「元々彼女は都に降りてくるのは反対だった……それを無理に連れてきたのは僕。彼女を身籠らせたのも僕。全部僕のせいだ」

「だからここで死にたい、と？」

「桔梗」の声には呆れが含まれているようだった。

「お前はつくづく阿呆だな」

「え……？」

「さて、私はそろそろ消えることにしようか。紫苑が来るまでどれくらいあるかはわからないが、この山には野犬も住んでいような食われてしまいかもしれぬぞ」

「あ、貴方は……？」

「言っただろう。自分の身は自分で守ると」

「桔梗」は笑う。

「ただし、お前を助けるつもりはない。ここで冷たくなるのも食いき切られるのも自由だ。私は紫苑とともに帰る。埋葬くらいはしてやろう」

「……………」

「それとも 罪悪感を引き摺りながらおめおめと生き長らえることを選ぶか？ どちらも無様には違いないが」

その挑発的な調子の奥に、燐はもう一つの彼女の言葉を聞き取っていた。

お前の愛しいさくらが、本当に望むのはどちらだ？

「私は興味深く見せてもらうことにしよう……」

「桔梗」の体が淡く光り、みるみるうちに丈を縮めていく。目を見張る燐の前でその体は子供のものとなり ぱたり、と雪の上に倒れ伏した。

「き、桔梗ちゃん」

放ってはおけず、駆け寄って抱き上げる。彼女の長い睫毛がふるふると震え、ゆっくりと瞼が開いた。

「寒い……」

つぶやく彼女の服装はといえば薄物一枚である。あちらの「桔梗」は寒さなど感じないのかもしれないが、これではあまりというものだ。燐は慌てて上掛けを羽織らせてやった。

「ねえ……ここ、どこ？」

「えっと」

「紫苑は？ 紫苑はどこ？」

「……………」

燐はふう、とため息をついた。きよろきよると見回している桔梗に、燐はゆつくりと言う。

「ここはね、僕の恋人の いや、妻のお墓。僕は、お墓参りに来たんだよ」

「………… お墓？」

表情を曇らせた桔梗は雪の上に座り直し、両手を合わせた。

「じゃあ、お祈りしなきゃ」

死者のためには祈るものだって、紫苑がそう言っていたから。その小さな背中を見守りながら、燐は濃い灰色の空を見上げる。

「ああ…………」

僕は阿呆だ。

「燐さん」

桔梗が振り向いた。

「どうして、死んじやったの？」

「……………」

澄んだ湖面のような瞳に、残酷な真実を教える気にはならなかった。もともとそのつもりで彼女を呼んだというのに……。それでももうひとりの「桔梗」に話したのだから、もういいのだ。

「僕が、守ってあげられなかったからだよ」

「守って…………？」

「うん」

罪の意識はきつと消えない。永遠に消えることはないだろう。そ

れでも、僕は生きなくちゃいけない。

貴方が無事でよかった。息を引き取る寸前、さくらはそう言った。だから……。

「帰ろうか」

燐は立ち上がり、桔梗を抱き上げた。

「わ、私歩けます!」

「いいんだよ」

彼女の体はひどく軽い。乗って来た馬の後ろに乗せ、燐はひらりと鞍にまたがった。ふと上空を見遣ると、どこか見覚えのある鳥が舞っている。

「紫苑の式神、かな」

「あ、羽櫻さんだ」

桔梗は空を見上げ、微笑んだ。

「じゃあ、紫苑が近くまで来てるのかもしれないね」

燐はそう言って馬を歩ませ始めた。ぽく、ぽく、ぽく。蹄の下で雪が溶けて行く。厚い雲に覆われていた空が、晴れ間を覗かせ始めていた。

二

迎えに来た紫苑と合流し、屋敷を焼け出された燐は彼の元へと身を寄せた。

疲労の色の濃い桔梗を自室で寝かせ、紫苑は燐と共にとある部屋に座した。都でも雪が降ったようで、部屋の中央には火鉢が置かれている。

「結局、どういうことだったんだ」

紫苑は不機嫌もあらわにそう言った。燐は困ったように微笑む。

「屋敷に火をつけたのは僕ではないよ」

「じゃあ、誰だ?」

「さあ……」

彼が都に帰ってきたのを聞きつけた誰かが、嫌がらせのつもりでやったのだろう。ひとつ間違えば彼の命も、また近接する屋敷の者の命も危うくなるところだったのだから、無論腹立たしい。だがそれだけではなかった。

「何だか、すつきりしちゃった」

「憑き物の落ちたような顔をして……」

紫苑はため息をついた。

「桔梗は一体何故あそこに？」

「僕が、呼んだんだと思う」

燐は眼を軽く伏せた。色素の薄い虹彩の中に、赤く灯った炭の色が映る。

「あやかしがひとの中で生きることがどれだけ危険で、かなしいことなのか。聞いて欲しかったんだ」

「……話したのか」

燐は無言で首を横に振った。

「彼女のもうひとつの人格の方には話したんだけど」

「……やはり」

紫苑は眉を寄せた。

「『彼女』が出てきたのか？ 何故だ？」

「僕の声が聞こえたのは『彼女』の方だったそうだよ」

「……」

「とても厳しいことを言われた。僕は阿呆だって」

紫苑は少し困惑を浮かべて彼を見つめる。

「まあ、あいつはああいうやつだから……」

「でも」

燐は笑った。

「紫苑のことは好きなんだね、『彼女』」

「……」

「結局のところ、『彼女』は僕を止めにくたんだと思う。紫苑じゃ

間に合わなかっただろうから」

「……お前はやはり」

「そう」

燐は頷いた。

「焼け落ちる屋敷からかろうじて抜け出して、本当に僕には何もなくなっただと思った」

胸を襲う虚無感。気がつくとは叡の山へと向かっていた。

「彼女の墓の側で死ぬつもりだったよ」

「お前は阿呆だ」

「うん」

紫苑の決めつけにも燐は微笑むだけだ。

「僕は阿呆だね」

「……もう死ぬ気はないのか」

「ああ言うのって、一度機会を逃しちゃうともう駄目だね」

茶化したように言いながら、燐は火鉢に手を翳す。

「だから、もう少し生きてみようと思う」

「……………」

「僕は、僕自身の身を守らないとね……………」

もう、彼を守ってくれるさくらはいないのだから。

「ところでお前」

紫苑はふと気がついて言った。

「屋敷を失ってこれからどうする？ この屋敷に住むか？」

「お邪魔虫みたいで嫌なんだけどなあ」

「……虫？」

「何でもない」

燐はくすつと笑った。

「じゃあ、しばらくここに置いてもらってもいいかな」

「ああ」

「宮中にもちゃんと行ってみる。もしもう一度官位につくことができたなら……橘家をちゃんと復興させたいんだ」

「しかし妻を娶る気はないのだろうか？」

「それは紫苑も同じだよな」

燐はあっさりと頷いた。

「僕は、有能な子供を養子にしてもいいと思っっているよ。……紫苑こそどうするんだい？ 御門家を断絶させるわけにはいかないだろう？」

「私は妻を娶っても無駄だ」

紫苑はぼつりと呟いた。

「え？」

聞き返す燐に、紫苑は無表情を保ち、言葉を紡ぐ。

「半妖は子孫を残す能力がない」

「……………」

「だから、妻を娶ることはない。必要もない」

「でも、紫苑」

「……………」

燐の言葉など聞こえなかったふりをして、紫苑は立ち上がった。

三

桔梗の部屋を覗くと、彼女は気配に気付いたのかぱちりと眼を開けた。闇の中、水晶のようなきらめきが踊る。

「しおん…………？」

「起こしたか。すまない」

「うっん」

何か話したいことがあるのだろうか、唇にきゅつと力を込めて彼女は紫苑を見上げている。紫苑は彼女の側へと歩み寄った。

「どうした？」

「………… 今日、燐さんの奥さんのお墓に行っただんです」

「ああ」

「ちゃんと、お祈りしてきました」

「……偉いな」

紫苑はその大きな手のひらで彼女の髪を撫でてやる。気持ち良さそうに眼を閉じながら、桔梗はつぶやいた。

「あんな山の中にまで、燐さんはお祈りしに行くんですね」

「……………」

「死ぬって、悲しい……」

殺性の強い水龍族とも思えない言葉に、紫苑は優しく微笑んだ。

「そうだな」

「……何だか、寂しいです」

縋るような眼差しで見つめられ、紫苑は少し怯む。

「紫苑」

桔梗は無言で身を起こし、紫苑の胸にぎゅっと抱きついた。

「……………」

外ではまた雪が降り始めていた。しんと雪が降り積もるうかすかな音と、互いの鼓動の音と。紫苑はそれに耳を傾ける。冷たい夜なのに、ここはとても暖かい。

いつの間にか、桔梗はまた眠りに落ちたらしい。体を離そうとして思いとどまり、紫苑は桔梗とともに体を横たえた。暗がりの中で彼女の寝顔を見つめる。まだ幼い造形だが、ふつくらと艶やかな唇や長い銀系の睫毛にふと女性らしさを感じ、紫苑は無理に眼を閉じて動悸を押さえ込む。

燐が最後に呼びかけた言葉　いつまでも一人ぼっちで生きていくのは、寂しすぎるよ。

「寂しい……か」

紫苑の声が届いたのか、桔梗がかすかに身を寄せてきた。仄かに甘い香りが鼻をくすぐる。柔らかな肢体は紫苑の腕の中で弛緩しきって、高い体温を彼に伝えていた。途方もない心地よさに包まれ、紫苑は徐々にまどろみへと誘われる。

ふと気がついて、紫苑は愕然とした。今この腕の中にあるものが失われるとき感じる感情。それこそが、真の寂しさなのだと。

燐の巻（後書き）

第二巻に続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5221z/>

妖 あやかし

2011年12月17日19時54分発行